こですHOKKAIDO 2022

（令和４年度版）

Collected papers Domestic Science Studies

北海道高等学校長協会家庭部会

こです HOKKAIDO 2022 【令和４年度版】

目　次

○　巻頭挨拶
北海道高等学校長協会家庭部会長　北海道江別高等学校長　田　邊　禎　明　1

○　よりよい社会を創るための家庭科教育に向けて
～今の時代を生き抜くための家庭科教育～
北海道教育庁空知教育局教育支援課高等学校教育指導班　指導主事　山　本　昌　枝　様　2

Ⅰ　令和４年度北海道高等学校長協会家庭部会活動報告

◆ 北海道高等学校長協会家庭部会の組織と今年度の事業内容について
北海道高等学校長協会家庭部会長　北海道江別高等学校長　田　邊　禎　明　3

◆ 公益財団法人全国高等学校家庭科教育振興会
全国高等学校長協会家庭部会 同北海道地区校長会 報告
北海道高等学校長協会家庭部会長　北海道江別高等学校長　田　邊　禎　明　5

◆ 令和４年度全国福祉高等学校長会理事会並びに総会 報告
全国福祉高等学校長会北海道地区理事
北海道置戸高等学校長　長　尾　勝　恵　7

◆ 北海道高等学校家庭科教育研究協議会企画委員会報告
1　第７１回北海道高等学校家庭科教育研究協議会を終えて
北海道高等学校家庭科教育研究協議会会長
北海道月形高等学校長　宮　崎　　円　8

2　オリエンテーション
北海道高等学校家庭科教育研究協議会会長
北海道月形高等学校長　宮　崎　　円　10

3　研究発表
□ 提言１テーマ　地域の素材を活用した上での思考力・判断力・表現力を生かす授業の取組
～地元とつながる家庭科の授業～
北海道興部高等学校　教諭　荒　谷　祐　子　12

□ 提言２テーマ　地域と連携した実践的・体験的な学習活動について
北海道浜頓別高等学校　教諭　奈良崎　　愛　13

4　分科会報告
北海道江別高等学校　教諭　萬　谷　陽　子　14

5　第７１回北海道高等学校家庭科教育研究協議会 講評
北海道教育庁学校教育局高校総体推進課高校総体式典係
主査　近　藤　麻理子　様　16

◆ 北海道高等学校長協会家庭部会調査研究委員会報告
北海道の小規模校における家庭科教育の現状と課題
北海道高等学校長協会家庭部会調査研究委員長
北海道月形高等学校長　宮　崎　　円　17

Ⅱ　令和４年度北海道高等学校家庭クラブ連盟活動報告

1　令和４年度北海道家庭クラブの活動について
　北海道高等学校家庭クラブ連盟成人会長
　北海道札幌丘珠高等学校長　飯田　知男　21

2　第６３回全国高等学校家庭クラブ指導者養成講座に参加して
　北海道当別高等学校　教諭　伊藤　恵里香　22

3　第７０回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会 北海道代表出場校として
　□ ホームプロジェクトの部　北海道札幌丘珠高等学校　教諭　佐藤　弘子　23

　□ 学校家庭クラブ活動の部　北海道札幌北高等学校　教諭　松本　奈巳　24

4　第７１回北海道高等学校家庭クラブ連盟研究大会・総会を終えて
　令和４年度北海道高等学校家庭クラブ連盟研究発表大会・総会当番校
　北海道旭川永嶺高等学校　教諭　横野　泉　25

Ⅲ　令和４年度北海道家庭科技術検定委員会活動報告

1　家庭科技術検定の実施について
　北海道高等学校家庭科技術検定委員会委員長
　北海道三笠高等学校長　藤田　博史　27

2　家庭科技術検定全国専門委員会に参加して
　□ 全国専門委員（被服）　函館大妻高等学校　教諭　笹森　美絵　28

　□ 全国専門委員（食物調理）　北海道三笠高等学校　教諭　斎田　雄司　29

　□ 全国専門委員（保育）　北海道当別高等学校　教諭　足達　しずか　30

3　令和４年度北海道高等学校家庭科技術検定評価研究協議会・検定委員会養成講座実施報告
　北海道家庭科技術検定事務局　北海道三笠高等学校　教諭　斎田　雄司　31

Ⅳ　家庭科教育に関する報告

1　第１０回北海道高等学校長協会家庭部会意見・体験発表大会を開催して
　事務局　北海道江別高等学校　教諭　鈴木　朋美　33

2　第１０回北海道高等学校長協会家庭部会意見・体験発表大会に参加して
　□ 発表校《家庭部会》　発表者　北海道三笠高等学校　３年　幸池　夏旺
　指導者　北海道三笠高等学校　教諭　明石　絵美　34

3　令和４年度北海道高等学校産業教育意見・体験発表大会に参加して
　第１０回北海道高等学校長協会家庭部会意見・体験発表大会最優秀賞受賞
　□ 発表校《福祉科》　発表者　北海道厚戸高等学校　２年　佐々木　そよか
　指導者　北海道厚戸高等学校　教諭　三浦　玲奈　35

4　北海道高等学校教育研究大会家庭部会に参加して
　北海道札幌啓北商業高等学校　教諭　野村　良子　36

5　初任段階教員研修Ⅰ年次研修（高等学校）　「一般研修」に参加して
　北海道天売高等学校　教諭　村上　成美　37

6　中堅教諭等資質向上研修（高等学校）に参加して
　北海道上士幌高等学校　教諭　田中　裕子　38

Ⅴ　福祉教育等に関する報告

1　第２０回「福祉に関する教科・科目設置校研究協議会」を終えて
函館大妻高等学校長　池田　延己　39

2　第７回北海道地区高校生介護技術コンテストを開催して
当番校　北海道剣淵高等学校　教諭　髙倉　彩　40

3　第９回全国高校生介護技術コンテストに参加して
第７回北海道地区高校生介護技術コンテスト最優秀賞受賞校
北海道石狩翔陽高等学校　教諭　佐藤　由香里　41

Ⅵ　各地区（ブロック）家庭科研究会の一年間の活動状況

1　空知管内　2　石狩管内　43

3　後志管内　4　胆振管内　44

5　日高管内　6　渡島・檜山地区　45

7　上川・名寄地区　8　留萌管内　46

9　宗谷管内　10　オホーツク管内　47

11　十勝管内　12　釧根地区　48

Ⅶ　特別寄稿

◆ 気がつけば３８年！
北海道月形高等学校長　宮﨑　円　49

◆ 大変お世話になりました。
北海道札幌手稲高等学校長　吉田　岳夫　49

◆ 家庭科教育との思い出
北海道当別高等学校長　宮本　匠　50

○　編集後記

北海道三笠高等学校長　藤田　博史　51

巻頭挨拶

北海道高等学校長協会家庭部会長
北海道江別高等学校長　田　邊　禎　明

日頃より、北海道高等学校長協会家庭部会の運営に多大なるご支援を賜り、心よりお礼を申し上げます。今年度、全道178校の加盟をいただき、長引くコロナ禍の収束が見通せない中、新型コロナウイルス感染症のリスクを低減させ感染防止対策を徹底し、ハイブリット開催を取り入れながら、今年度予定していた事業を実施いたしました。２年ぶりの生徒の生き生きとした活動、発表を通じてその姿に喜びを感じ、本来の姿に戻りつつあることを実感しております。北海道教育委員会、北海道高等学校長協会、加盟いただいた各高等学校等の関係各位のご理解とご協力をいただきましたこと、改めて深く感謝申し上げます。全国の状況も同様に各種大会、会議等も通常通りの開催になってきています。

新学習指導要領が年次進行により実施されます。教育課程の理念として「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を学校と社会とが共有し、それぞれの学校において、必要な教育内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを明確にしながら、社会との連携・協働によりその実現を図っていく。」こととし、これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自分の人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを教育課程において明確化し育むことを目指す「社会に開かれた教育課程」が掲げられております。

専門教科「家庭」においては、探究的な学びを行う際に、家庭の生活に関わる産業の見方・考え方を働かせ、専門的な知識と技術などを相互に関連付けてより深く理解させるとともに、地域や社会の生活の中から問題を見いだして解決策を構想し、計画を立案し、実践、評価、改善して新たな問題解決に向かう過程を重視した実践的・体験的な学習活動の充実を図る必要があります。また、地域や産業界等との連携・交流を通じた実践的な学習活動や就業体験活動を積極的に取り入れるとともに、社会人講師を積極的に活用するなどの工夫に努めることが求められています。

社会が大きく変化するこの時代、家庭科教育においても、新学習指導要領に基づき新たな取り組みを模索しながら、生徒たちの生涯にわたって、持続可能な生き抜く力を育成する重要な教科となっていくと確信しているところです。本部会といたしましても、新しい時代に求められる家庭科教育を推進するための様々な活動に取り組んでまいります。

私事ではありますが、この３月をもちまして定年退職いたします。２年間家庭部会長を務める中で、昨年度の１年間は様々な活動がコロナの影響で制限されており、今年度ようやく部会の様々な活動を見ることができました。学校における家庭科教育はもとより、多岐にわたる分科会、委員会の活動を全国と連携してこのように精力的且つ献身的にほとんどすべての家庭科教員の手によって運営されていることを知り、家庭科教育の重要性を再認識すると共に生活に直結した教育のさらなる推進は必然であると強く感じたところです。

おわりに、今年度の各事業におきまして、生徒の活躍の場を提供するため、ハイブリット開催を含め可能な限りの取り組みをしていただきました当番校および参加者・関係するすべての方に重ねて感謝申し上げますとともに、次年度もコロナの収束如何に関わらず、家庭部会に対する皆様のご支援、ご協力をお願い申し上げ、巻頭のご挨拶といたします。

【家庭部会ホームページ】
http://www.do-kateibukai.hokkaido-c.ed.jp/

よりよい社会を創るための家庭科教育に向けて
～今の時代を生き抜くための家庭科教育～

北海道教育庁空知教育局教育支援課高等学校教育指導班
指導主事　山　本　昌　枝

近年、コロナ禍が続く日々の中、様々な場面において、改めて自分自身の生活を見つめ直す機会が増えてきています。今までは生活の中で、できていたことに制限がかかり、マスクや消毒をすることが当たり前となっている今、普通の暮らしを送ることの幸せを実感させられます。

そのような中、学習指導要領が改訂され、学校教育でも様々な変化がありました。高等学校家庭科においては、実践的・体験的な学習活動を通して、よりよい社会の構築に向けて主体的に家庭や地域の生活を創造する資質・能力の育成を目指すとともに、生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善が図られるよう、内容が改善されました。このことは、生徒が、家庭科の学びを通して、自立した生活者として必要な生活の科学的な理解や、生活課題を解決する力を育むことが求められていることとなります。

また、選挙権年齢及び成年年齢が 18 歳に引き下げられたことにより、高校在学中に成人を迎える生徒にとっては、政治や社会がより身近なものとなったことや、男女が協力して主体的に家庭を築き相互に支え合う社会の構築に向けて、家庭や地域の生活を創造しようとする態度や、主体的に地域社会と関わり、参画しようとする態度を生徒に育むことも期待されています。

これらの力や態度を生徒に育ませるためには、生徒が社会との関わりの中で営まれている、家庭生活や地域の生活への関心を高め、生涯を見通して生活を創造する主体としての視点が重要となることから、持続可能な社会の構築を目指し、グローバルな視点に立って生活の現状を見つめる機会を設定することが必要です。生徒が自ら「なぜそうするのか」「どうしたらよいか」という課題意識を持ち、実践的・体験的な学習活動を通して、家族・家庭、衣食住、消費や環境など家庭生活の様々な事象の原理・原則を科学的に理解すること及び、そこで身に付けた知識と技能を、実際の生活上の意思決定や問題解決に生かし、男女が協力して家庭や地域の生活を主体的に創造する資質・能力を育成することが大切となります。

さらに、家庭科で扱う生活課題は、今日の喫緊の課題である SDGs とも繋がっていることから、学習を通じて生活者の立場から、よりよい市民としてどのように行動すべきであるかを生徒に考えさせることから、家庭科は、多様で不確実な時代を生き抜くための大切な教科でもあるといえます。

教科指導訪問等を通して、家庭科の授業を拝見させていただく機会があり、生徒に卒業するまでに身に付けさせたいことを明確にしながら、授業の１時間１時間を大切にされている、多くの先生方の授業を拝見しています。学校や生徒の実態に合わせた教材を用いることで、生徒が主体的に学習に取り組み、理解がさらに深まるよう教材研究を重ねられていることを感じ、頭が下がります。先生方の姿から、「教師」という仕事は、自らが常に学び続ける姿勢が不可欠であることを実感します。

今後、これまで以上に、家庭科教育の果たす役割がますます重要になってくるものと考えられます。先生方におかれましては、これまでも本道の家庭科教育の発展に御尽力いただいていることに深く感謝申し上げますとともに、今後とも熱意ある教科指導の中で、生徒の「生きる力」を育む家庭科教育の推進をお願いいたします。

Ⅰ　令和４年度北海道高等学校長協会
家　庭　部　会　活　動　報　告

北海道高等学校長協会家庭部会の組織と今年度の事業内容について

北海道高等学校長協会家庭部会長
北海道江別高等学校長　田　邊　禎　明

今年度、北海道高等学校長協会家庭部会には、178校の加盟をいただきました。加盟並びに各種のご支援ご協力をいただいたことに厚く感謝申し上げます。

今年度の本家庭部会の組織、事業内容等は次のとおりとなっています。

■令和４年度　部会の役員構成等

役　職	校長名・学校名	兼務する役職等
部会長	田　邊　禎　明 江　別	全国部会道代表理事 全国部会常務理事 全国家庭振興会理事
副部会長	宮　﨑　　円 月　形	全国部会常務理事 全国家庭振興会評議員 企画委員長 調査研究委員長 高教研部会長
	長　尾　勝　恵 置　戸	全国部会理事 全国福祉部会道理事 福祉委員会委員長 調査研究委員 道地区委員
	飯　田　知　男 札幌丘珠	家庭クラブ代表理事 調査研究委員
	藤　田　博　史 三　笠	全国技術検定道理事 企画委員 調査研究委員 家庭科技術検定委員長 道地区委員
	吉　田　岳　夫 札幌手稲	調査研究委員
監　事	渡　邊　周　一 千歳北陽	調査研究委員 道地区委員
	壽　浅　章　洋 野　幌	調査研究委員 企画委員
理　事	宮　本　　匠 当　別	調査研究委員 企画委員
	坂　野　裕　悦 名寄産業	調査研究委員 企画委員 道地区委員
	池　田　延　己 函館大妻	全国福祉部会特任理事 福祉委員会委員 調査研究委員 道地区委員
他の道地区委員	谷　川　敬　一 倶知安	後志、調査研究委員
	坪　井　克　彦 登別青嶺	日胆、調査研究委員
	小　島　政　裕 広　尾	十勝、調査研究委員
	三　浦　治　彦 釧路明輝	釧根、調査研究委員

■令和４年度　部会の主な事業

月日	事　業　（会　場）
4/14	家庭科技術検定常任理事会（三笠高）
4/21	第１回家庭部会役員研究協議会（ﾗｲﾌｫｰﾄ）
4/27	全国家庭科教育振興会理事会（東京）
5/11	家庭部会総会（ﾗｲﾌｫｰﾄ）
5/12	道家庭クラブ連盟第１回研究協議会（教育文化会館）
5/23	全国福祉校長会第１回理事会（東京）
5/24	全国家庭部会、常務理事会、理事会（東京）
5/24	全国家庭部会総会、研究協議会（東京）
5/26	技術検定代表理事会（東京）
7/21･22	全国家庭クラブ連盟指導者養成講座（東京）
7/28･29	全国家庭クラブ連盟研究発表大会（山形）
8/ 2	道家庭科教育研究協議会〔zoom〕
8/ 2	全国家庭部会北海道地区校長会〔zoom〕
8/2･3	全国家庭科実践研究大会広島大会（広島）
8/ 3	家庭科技術検定常任委員会（江別高）
8/ 4	家庭科技術検定検定委員養成講座（被服・食物・保育）（江別高）
8/19	第７回北海道高校生介護技術コンテスト（剣淵高）
8/29	第10回家庭部会意見・体験発表大会（江別高）
9/28･29	全道家庭クラブ研究大会、総会〔zoom〕（旭川永嶺高）
10/15･16	第31回全国産業教育フェア～青森大会（青森）
10/18	道高等学校産業教育意見・体験発表大会（小樽水産高）
10/20･21	全国家庭部会研究協議会（福井）
11/ 4	福祉に関する科目設置校研究協議会（函館大妻高）
1/12	高教研家庭部会（札幌南高）
2/ 3	全国常務理事会、理事会（東京）
2/22	道家庭クラブ連盟第２回研究協議会（ﾗｲﾌｫｰﾄ）
〃	第２回家庭部会役員研究協議会（ﾗｲﾌｫｰﾄ）

※令和４年12月14日現在

【令和４年度 北海道高等学校長協会家庭部会 組織図】

総会（全国加盟：Ｒ４年度 30 校）

常務理事会

理事会

全国高等学校長協会
家庭部会

北海道産業教育振興会

さんフェアは、３年に１回開催。
北海道産業教育振興会家庭部会長校は、江別高校。

全国８ブロック
校長部会
家庭部会

北海道高等学校長協会
家庭部会

公財）全国高等学校
家庭科教育振興会

総会（全道加盟：Ｒ４年度 178 校）

公財）全国高等学校
家庭技術委員会

全国高等学校
家庭クラブ連盟

役員会　（15 名）

①部会長
②副部会長
・家庭クラブ連盟成人会長
・家庭科技術検定委員長
・調査研究委員長
・企画委員長
・福祉委員長
・部会長委嘱副部会長
③理事
④監事
⑤地区代表委員（９地区）

全国福祉
高等学校
校長会

高等学校教育研究会
※研究紀要担当
道南・後志地区
（函館西高校）

調査研究委員会
14 名
課題解決に向けた方策について

・実践事例の収集や紹介
・指導資料や具体的指導方法の提供

企画委員会
（運営協議会）
５名
令和４年度北海道高等学校家庭科教育研究協議会

会場：Zoom
事務局：月形高校

北海道高等学校家庭科
技術検定委員会
（事務局：三笠高校）
令和４年度北海道高等学校家庭科技術検定評価研究協議会・検定委員養成講座

会場：江別高校

福祉委員会
２名
福祉に関する教科・科目設置校研究協議会の企画等

（担当：《北海道地区理事校》置戸高校）

北海道高等学校
家庭クラブ連盟
（事務局：札幌丘珠高校）

学科設置校教頭会
（事務局固定）
江別高校

学科設置校科長会
（事務局固定）
江別高校

研究発表大会・総会
(9/28～9/29)旭川永嶺高校

※線 ═ ・ ═ ・ ═ で囲まれた部分は家庭部会の組織や事業等を示す。

公益財団法人全国高等学校家庭科教育振興会
全国高等学校長協会家庭部会 同北海道地区校長会　報告

北海道高等学校長協会家庭部会長
北海道江別高等学校長　田　邊　禎　明

Ⅰ　公益財団法人全国高等学校家庭科教育振興会理事会

令和４年４月27日（水）　13:20～15:00
Ｗｅｂ開催

出席者　財団理事　田邊　禎明（江別）

議　事

1　令和３年度事業報告

(1)公益事業及び収益事業について

主な事業　家庭科技術検定の実施

令和３年度　家庭科技術検定受検状況

①	被服製作	37,355人
②	食物調理	69,979人
	計	107,334人
	前年比	－2,219人
③	保育	104,499人
	前年比	2,708人

(2)令和３年度収支決算書

経常収益		188,546,741円
主な事業	検定	158,263,000円
	出版	23,592,280円
経常費用		179,663,039円

2　令和４年度事業計画

(1)公益事業及び収益事業

主な事業　家庭科技術検定の実施

(2)財団正味財産　362,231,832円

(3)その他の事業

(4)家庭科振興会役員について

理事長

木次　愼一（千葉県立佐倉東高等学校）

北海道代表理事

田邊　禎明（北海道江別高等学校）

評議員

宮崎　　円（北海道月形高等学校）

Ⅱ　全国高等学校長協会家庭部会

＜常務理事会＞

令和４年５月23日（月）　13:00～13:20
Ｗｅｂ開催

出席者　全国常務理事　田邊　禎明（江別）

協　議

1　全国理事会・研究協議会の運営
2　総会・研究協議会の運営
3　調査研究委員会委員
4　家庭に関する研究大会等の開催予定

連絡事項

1　第128回秋季研究協議会（福井大会）
2　第66回家庭科実践研究会（広島大会）
3　被服・デザイン系校長会（栃木大会）
4　第32回全国産業教育フェア（青森大会）
5　第70回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会（山形大会）
6　令和４年度産業・情報技術等指導者養成研修

＜理事会＞

令和４年５月23日（月）　14:00～15:30
Ｗｅｂ開催

出席者　全国常務理事　田邊　禎明（江別）

報告事項

1　令和３年度課程部会事業報告
2　令和３年度会計決算報告監査報告

収入　20,336,236円

内　会費　11,352,000円

（6,000円 × 1,892校）

3　令和４年度校長功労者表彰
4　令和４年度家庭部会役員・常務理事

理事長

木次　愼一（千葉県立佐倉東高等学校）

北海道常務理事
田邊　禎明（北海道江別高等学校）
宮崎　　円（北海道月形高等学校）

5　令和４年度家庭部会事業計画

6　令和４年度家庭部会会計予算書
収入　　20,415,136円
内　会費　9,450,000円
（5,000円 × 1,890校）
主な支出　事業費　9,050,000円
地区別校長会　　900,000円

Ⅲ　総会・研究協議会
令和４年５月24日（火）　10:00～16:20
ハイブリット開催
出席者　全国常務理事　宮崎　　円（月形）

1　開会式
(1)理事長挨拶　　木次　愼一
(2)来賓祝辞
文科省初等中等教育局　林　　正敏
産振中央会専務理事　　岩井　　宏
(3)校長功労者表彰　挨拶　羽山　　潔

2　総会・研究協議会

3　講演（周年記念特別講演）
「共に生きる　～持続可能な社会・共生社会の実現に向けて～」
アルピニスト　　野口　　健　氏

4　研究協議
(1)「家庭に関する学科の学びを深めるために」
栃木県立佐野東高校長　飯塚　晃代
(2)「主体的・対話的で深い学びの視点を生かして」
神奈川県立泰野曽屋高校　小山　修
(3)「家庭科技術検定指導におけるＩＣＴの活用」
群馬県立前橋清陵高校　名塚　康恵
(4)「家庭学科等卒業者の進路状況調査」
東京都立忍岡高校　　造作　聡美

5　講話
「新学習指導要領の着実な実施を目指して」
文科省初中局教科調査官　山村　季代

6　諸連絡

Ⅳ　全国校長会家庭部会北海道地区校長会
1　令和４年８月２日（火）13:00～14:45
Ｗｅｂ開催

2　次第
進行　北海道三笠高等学校長　藤田　博史
(1)部会長挨拶
北海道校長協会家庭部会長
北海道江別高等学校長　　田邊　禎明
(2)来賓挨拶
全国校長協会家庭部会副理事長
栃木県立宇都宮中央女子高等学校・
栃木県立宇都宮中央高等学校長
稲　葉　昌　弘　　氏
(3)説明
「全国の高等学校家庭科教育の現状と課題について」
全国校長協会家庭部会副理事長
栃木県立宇都宮中央女子高等学校・
栃木県立宇都宮中央高等学校長
稲　葉　昌　弘　　氏
(4)報告
令和４年度全国高等学校長協会家庭部会総会・研究協議会について
北海道校長協会家庭部会長
北海道江別高等学校長　　田邊　禎明
(5)協議
「家庭科教育の現状と課題について」

家庭部会校長参加者数　　15名

令和４年度　全国福祉高等学校長会理事会並びに総会

報告

全国福祉高等学校長会北海道地区理事
北海道置戸高等学校長　長　尾　勝　恵

１　第１・２回理事会報告

※内容については、学科主任代表者を交えての合同会議において周知済み。

(1)「規約改正」について

・全国福祉高等学校長会理事長を長年、東奥学園高等学校(青森県私立)が担当。令和５年度からは輪番制とする。業務等の移行を含めた規約改正を各支部で要検討。

・理事の増員と副理事長３名の担当部を新規開設。

・新規約での業務開始は令和５年度。但し、業務によっては今年度から前倒し可。

(2)令和４年度生徒体験発表中央審査(報告)

・本審査はコロナ禍のため未実施。生徒の頑張りを認める方法として、審査結果上位者には全国福祉高等学校長より表彰し、賞状の授与等を検討。ホームページへの掲載については、個人情報の絡みから慎重に対処すべき。

(3)教員要件研修について

・平成13年度頃に実施した研修は、緊急対応として国が実施。今後は国で行う意思がないため、校長会として要件を満たした教員が異動等で不在となる学校を出現させないように、早めに手を打つ必要あり。NITでは、100名規模の研修は小規模と見なされるため、実施の期待はできない。

・１回の研修総経費は約600万円。100名程度の参加者を募る必要あり。

・年内から準備を。今後は、５年に１回程度の実施が必要。

(4)文部科学省初等中等教育局視学官　矢幅清司　氏による講演

・現在言われている普通科改革とは、普通科≠進学校。進学対応・多方面進路・学習困難など多彩。

・今年度の入学生は、新学習指導要領施行後、最初の入学生。また、３年時（令和６年度９月～３月）には、新学習指導要領に対応した最初の大学入試の当事者。

・マイスター・ハイスクール（次世代地域産業人材育成刷新事業）に、看護・福祉・情報の専門学科からの参加がまだない。

・地域との協働による高等学校教育改革推進事業として、今まで以上に地域の意識を。

・「教育課程実践検証協力校事業」へは現在、函館大妻高校のみ参加。奮って協力を。

２　総会

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、Zoomにて実施。

(1)来賓挨拶

・文部科学省　初等中等教育局　視学官矢幅清司氏より、介護福祉士国家試験合格率が、高水準で維持。就職率は地元９割。今後はより福祉を学ぶ高校生のために、教員研修を通して教師の質の向上を。

・埼玉県教育局県立学校部高校教育指導課長　田中邦典氏より、学習指導要領は2040年度を見据えて他職種へ視点移動。埼玉県では、福祉科と看護科がICTを活用した合同授業を実施。

(2)議事等

・業務分散についての規約改正に伴う臨時総会を12月実施。

・令和５年２月11日に福祉フォーラムを実施。詳細は、ホームページへ掲載。

第７１回北海道高等学校家庭科教育研究協議会を終えて

北海道高等学校家庭科教育研究協議会会長
北海道月形高等学校長　宮　﨑　　円

令和４年度第71回北海道高等学校家庭科教育研究協議会は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点からＷｅｂ会議システムｚｏｏｍにより８月２日（火）、江別高校を本部として３年ぶりに開催することができました。

リモートではございましたが、ご来賓として、北海道教育庁学校教育局高校教育課長　山城宏一　様、全国高等学校長協会家庭部会副理事長　栃木県立宇都宮中央女子高等学校・栃木県立宇都宮中央高等学校長　稲葉　昌弘　様には、ご臨席ならびにご挨拶をいただきますとともに、全体会Ⅱにおけるご助言・講評を北海道教育庁学校教育局高校総体推進課高校総体式典係主査　近藤　麻理子　様よりいただきました。

北海道高等学校長協会家庭部会に加盟の校長先生方をはじめ、多数の先生方のご参加により、お陰様で盛会のうちに所期の目的を達成できましたことをこの場をお借りしてお礼申し上げます。

本研究協議会は、北海道高等学校長協会家庭部会企画委員の校長５名と４名の家庭科教頭ならびに全道各地より選出された22名の運営研究員そして事務局（月形高校）３名の計34名で組織され、企画・準備・運営業務を担っております。また、今年度は急遽本部を設営することになり、江別高校さんのご協力の下、対面に近い形で開催することができましたこと深く感謝申し上げます。

本研究協議会は、家庭科教育に関する諸問題を研究し、会員の資質向上と北海道高等学校家庭科教育の振興を図ることを目的に昭和27年（1952年）に岩見沢西高等学校を会場に第1回が開催されてから70年にわたり、全道の家庭科教師の研修の場として受け継がれてきた歴史ある研究協議会ではありますが、残念ながらコロナ禍で２年間にわたり開催を中止せざるを得ませんでしたが、ＧＩＧＡスクール構想に伴うＷｉ－Ｆｉ環境の急速な整備により、全道各地をあるいは全国を結び、対面での開催と遜色無く研究協議会を開催できましたことは、喜ばしくもある一方で、ＩＣＴ技術を始めとした技術革新に乗り遅れてはいけないことを痛感する機会にもなりました。

さて、今年度は、開会式・オリエンテーションに続いて全体会Ⅰとして、家庭クラブの指導、家庭科技術検定の指導についてと、研究発表として２つの提言がなされました。

家庭クラブ活動の指導では、今年度北海道代表として山形県で開催された全国高等学校家庭クラブ研究発表大会に、ホームプロジェクトの部で参加された札幌丘珠高校３年生　種市心愛さんから「我が家の料理革命！～無駄をなくそう～」と題して、無駄な食材を買わないだけではなく、食材をできる限り使い切ることで食品ロスを抑え、環境問題やＳＤＧｓに対する取組が発表されました。日頃から熱心に家庭クラブ活動の指導に当たられている同校　佐藤弘子先生にも厚くお礼申し上げます。

また、家庭科技術検定の指導では、今年度事務局校の三笠高校　斎田先生より、家庭科技術検定実施校の裾野が広がるよう、動画を使った指導方法の解説ならびに新規の申込み方法について等丁寧な説明がありました。ぜひ、「家庭」を履修している生徒達の知識と技能の向上を目指すとともに、先生方におかれましても検定員養成講座を受講し、ご自身の技術向上につなげていただきますようお願い申し上げます。

提言につきましては、オホーツク地区から、北海道興部高等学校　荒谷祐子先生より「地域の素材を活用した上での思考力・判断力・表現力を生かす授業の取組」と題して地域資源を活用し、料理レシピの開発に取り組んだ前任校の雄武高校での授業実践について、宗谷地区からは浜頓別高校　奈良崎愛先生より、「地域と連携した実践的・体験的な学習活動について」と題して、外部人材を積極的に活用しながら授業改善を図る取組が発表されました。

午後からは、ご参加の校長先生方は全国高等学校長協会家庭部会北海道地区校長会として、稲葉副理事長様から家庭科教育に関する全国の現状と課題等に関する情報提供ならび参加者同士の情報交換が行われました。

また、ご参加の先生方には、今年度新たに高等学校家庭科教諭として採用された初任の先生方をご紹介させていただきました。ぜひ、家庭科教員同士のネットワークをしっかり結び、本道の家庭科教育の充実・向上に向けた取組につなげていただきますよう願っております。研究協議は、ご参加の先生方を１グループ６～７名から構成する９グループに分け、ｚｏｏｍのブレークアウトルーム機能を活用し、午前中の提言を踏まえ「地域と連携した効果的な取組について」や、今日的な課題として「観点別評価の実際と課題について」「ＩＣＴに係る取組と課題について」など80分間が短く感じられるほど活発な協議がなされました。

研究協議終了後は、全体会Ⅱとして、各グループの報告を行うとともに、近藤主査より、提言されたお二人へのご講評ならびに、ＩＣＴの活用に関し、生活に関わる外部の様々な情報収集やデータの整理など、指導の各場面において活用し学習の効果を高める工夫についてのご助言をいただきました。

Ｗｅｂ会議システムを使用した不慣れな状況での開催ではありましたが、皆様の支えにより所期の目的を達成し、成功裏に終えることができました事を深く感謝申し上げます。

本研究協議会組織

1　役員

部会長	田邊禎明	（江別）
会長	宮﨑円	（月形）
副会長	宮本匠	（当別）
	坂野裕悦	（名寄産業）
監事	藤田博史	（三笠）
	壽浅章洋	（野幌）

2　運営研究員

教頭	後藤あゆみ	（月寒）
	佐紺摂子	（函館西）
	石川博史	（長万部）
	上村晴美	（上磯）
石狩地区	高橋あき	（札幌南）
	上澤田朋子	（札幌白石）
	高橋理緒	（札幌工業）
	柿澤小百合	（札幌新川）
	東昌江	（石狩翔陽）
	萬谷陽子	（江別）
	高橋真理	（当別）
	上原さゆり	（文教大附属）
道南地区	佐藤あゆみ	（函館工業）
	橋本晃子	（市立函館）
後志地区	秋山志保子	（小樽桜陽）
	渋井美和子	（倶知安）
空知地区	松本清子	（岩見沢東）
	吉村佳名子	（滝川西）
上川地区	小松裕美	（旭川商業）
	坂上真子	（名寄産業）
留萌地区	蒔田直子	（羽幌）
宗谷地区	武石彩	（稚内）
ｵﾎｰﾂｸ地区	岩本真実	（北見緑陵）
日胆地区	大森裕介	（静内）
十勝地区	相馬良美	（広尾）
根釧地区	芝田愛佳	（中標津農業）

3　事務局校（北海道月形高等学校）

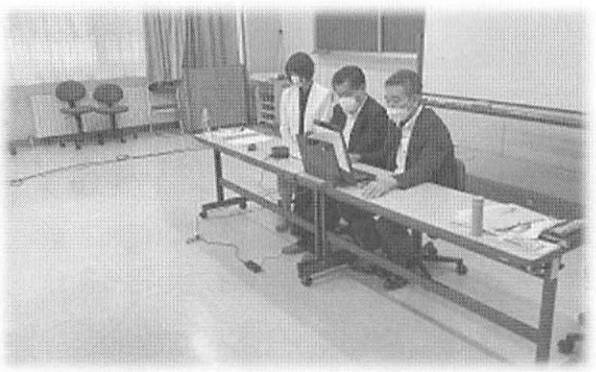
事務局長（教頭）	菅原光男
事務局員（事務長）	藤田順久
事務局員（教諭）	駒谷綾子

オリエンテーション

北海道高等学校家庭科教育研究協議会会長
北海道弟子屈高等学校長　宮﨑　　円

1　はじめに

本日は、全道各地の先生方がオンラインでつながり、本研究協議会を３年ぶりに開催できましたこと深く感謝申し上げます。新型コロナウイルスの感染が第７波のピークを迎える中、全ての参加者の皆様が、安全・安心に研修の機会を持つことが出来ましたことは、感慨深いものがあります。ご多用の中、ご参加いただきました皆様には、厚くお礼申し上げます。



2　新学習指導要領と指導の観点

さて、今年の４月より新しい学習指導要領がスタートし、各教科の「目標」「内容」の記述が、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の３つの柱に再整理されました。

特に教科家庭においては、生きて働く知識・技能の習得、すなわち、家族や家庭の意義や社会との関わりについて理解深め、生活を主体的に営むために必要な理解を図るとともに、それに係る技能を身につけるようにすること。

科学技術の進歩や世界中の物事が瞬時につながる現代社会に於いて、未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力」の育成、すなわち理解していること出来ることを、子ども達が生活者として使えるのか、あるいは、家庭や地域及び社会における生活の中から問題を見いだし、生涯を見通して生活の課題を解決できる力の育成。

さらに、家庭科の学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性等」すなわち、どのように社会や世界と関わり、より良い人生を送ることができる資質・能力の育成を目指すこととなっております。

新たに、成年年齢の引き下げによる消費者教育の重要性や金融教育の実践、安全・防災や環境に配慮した住生活の工夫、高齢者の尊厳や介護についての理解や生活支援に関する技術の習得など家庭科の果たす役割はますます、重要になっております。

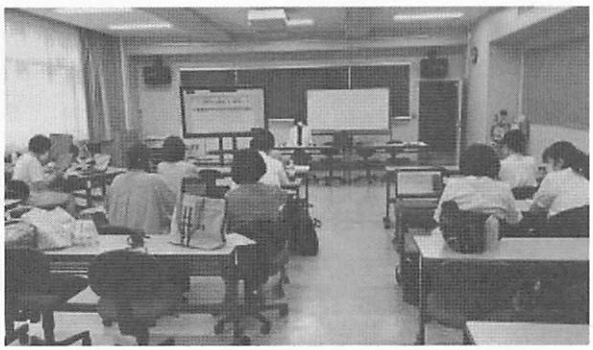
3　全体会Ｉについて

さて、私は、先週山形県で行われました学校家庭クラブの全国大会に北海道ブロックの審査員の一人として参加してまいりました。少子高齢化、健康、環境、国際化、情報化、SDGｓなど、家庭や地域を取り巻く生活課題について自ら考え、行動し、解決を図る取り組みが発表され、高校生の瑞々しい感性や気づき、そして課題解決に向けて取り組むパワーに圧倒された２日間でした。

本日の全体会Ｉでは、ホームプロジェクトの部で北海道代表として出場した札幌丘珠高校の生徒さんの取り組みについてご発表いただきます。

一方、子ども達に正確な知識や技能を身につけさせることやご自身の振り返りのためにもぜひ、家庭科技術検定を活用していただきたいと思い、技術検定事務局の三笠高校斎田先生より家庭科技術検定の概要と申込み方法についてご説明いただきます。

また、ご提言をいただくお二方からは、「地元の特産品を使った商品開発」に向けた「地産地消の料理レシピ集」の取り組みや、幅広く外部の人材を活用し、生徒が専門的な知識を身につけられるような授業展開など、新しい学習指導要領で求められる課題解決型の学習や、地域と連携した学びについてのご提言となっております。



4　研究協議について

午後からの分科会は、zoom のブレークアウトルーム機能を活用し、少人数グループでの研究協議を行います。ぜひ、普段なかなか対面で顔を合わせる機会のない昨今でございますので、貴重な意見交換の時間となりますことを願っております。

なお、分科会の前に、本日ご参加いただいている今年度高等学校家庭科教諭として採用された初任者の先生方を参加者名簿の記載順に紹介させていただきます。

教科の特性上、経験年数にかかわらず、ほとんどの先生方が各校お一人の体制かと思われます。

ぜひ、家庭科教員同士のネットワークをしっかり結び、本道の家庭科教育の充実に取り組んでいけることを願っております。

5　おわりに

それでは、本研究協議会が、ご参加の皆様にとって有意義な時間となり、明日への活力につながりますよう祈念申し上げ開催に当たってのオリエンテーションといたします。

提言１　地域の素材を活用した上での思考力・判断力・表現力を生かす授業の取組～地元とつながる家庭科の授業～

北海道興部高等学校　教諭　荒　谷　祐　子

１　はじめに

令和４年３月まで３年間勤務していた前任校、雄武高校での取組について報告する。

「自分たちの町に、少しでも貢献することはできないだろうか」という声が、以前から生徒たちの中にあった。そのため、３年生の学校設定科目「生活教養」の中で、地域の特産品や食文化などを調べ、地産地消の料理レシピの開発を行うことにした。

２　実践内容

(1)実践のねらい

地産地消の料理レシピ集の作成を通して、地元産業への理解、調理技術の向上、地域貢献をねらいとする。

(2)授業内容

①特産品について

オホーツク海は世界有数の漁場であるが、人口減少や高齢化などにより後継者は不足し、漁業の存続が心配される状況にある。酪農や畑作も同じような現状にあるため、これらを取材した資料を基に、第１次産業の課題と今後について考える授業を行った。また、地元企業を招いて、雄武町の特産品である韃靼そばに関して講話をしていただいた。

②歴史や食文化について

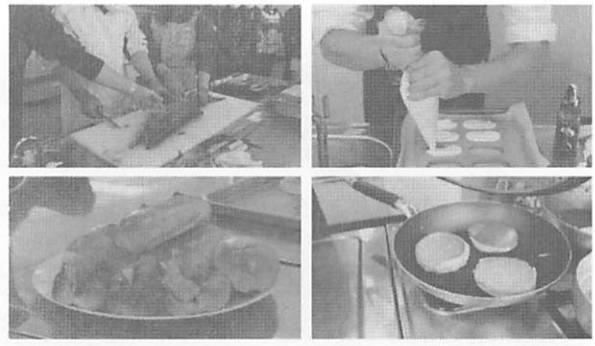
アイヌ遺跡のチャシや北隆鉱山など町の歴史と、昔から食べられている飯寿司やルイベなどの家庭料理について調べる取組を行った。

③地元の特産品を使った調理実習

栄養成分や使いやすさなどから、韃靼そば粉を使用したお菓子や調理パンの作製を行った。初めは上手くいかず失敗ばかりであったが、改善策を図書館やインターネットなどを活用して調べ、試行錯誤を重ねた。また、地元の漁師さんの協力で鮭のさばき方や家庭で食べられている鮭料理の調理実習も行った。

④レシピ集作成

地域素材を使った調理実習で完成させた料理レシピを収録し、レシピ集は、雄武町商工会や観光協会、飲食店などに配布した。



３　成果と課題

試行錯誤しながら調理実習を行ったことは、自ら思考し行動する力を身につけるきっかけとなり、生徒の達成感にもつながった。また、地元の方に授業へ入っていただくことで、様々な職業人の考えや価値観に触れることができ、卒業を控えた生徒にとって、貴重な経験となった。

今回の取組を通して、郷土への思いや愛着を再確認し、持続可能な社会についても考えることができた。しかし、限られた時間で行うため、年間指導計画の工夫や、生徒の活動を様々な視点から評価を行う必要があり、評価方法の改善が必要であると感じた。

４　おわりに

昨年度は、フードデザインが教育課程上開講しなかったため、「生活教養の中で調理を行えないか」という生徒の要望が強く、このような取組となった。高校の理解、雄武町商工会や観光協会、漁業協同組合、地元企業などの多大なるサポートをいただいたことに感謝している。

提言２　地域と連携した実践的・体験的な学習活動について

北海道浜頓別高等学校　教諭　奈良崎　愛

１　はじめに

本校のある枝幸郡浜頓別町は、宗谷管内のオホーツク海に面しており、ホタテを中心とした漁業や酪農といった第１次産業、また、建設業や乳製品、水産加工製品の製造業や加工業といった第２次産業を中心とした町である。

２　本校の概要

昭和25年４月１日、北海道稚内高等学校浜頓別分校（定時制課程）として始まり、その後全日制課程が設置された。平成21年度まで商業科もあったが、現在は普通科のみの１間口校として現在に至っている。

３　教育課程における家庭科（令和４年度）

	科目	必修・選択	単位数
１学年	家庭総合	必修	2
２学年	子どもの発達と保育	選択	2
３学年	フードデザイン	選択	3
	服飾手芸	選択	2

※今年度より必修変更 家庭総合１・２年 分割履修

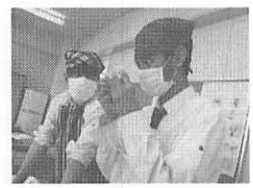
４　実践内容

(1)研究の目的

新採用として赴任した令和２年４月。引き継ぎで聞いていたような実習や授業ができず、学校の外との繋がりが少なく閉鎖的になっていると実感した。就職希望など地元志向が強いものの、興味・関心のある職種では視野の狭さを感じることもあった。そのため、コロナ禍であってもできるだけ生徒自身に地域と繋がり、連携した学習活動を通して、その一員としての自覚をもち、共に支え合って生活することの重要性を身につけさせたいと思い、外部講師による授業を開拓し、実施した。

(2)取組について（R３．４～R４．６実施分）

①“届けよう、服のチカラ”プロジェクト（ファーストリテイリング）



②チーズセミナー/骨・カルシウムセミナー（雪印メグミルク）

③食べるから強くなる！高校生のための食事！（明治）

④シュガーセミナー　砂糖・スイーツづくりの基本（JAグループ北海道）

⑤高齢者疑似体験（浜頓別町役場保健福祉課）

⑥認知症サポーター養成講座（浜頓別町役場）

⑦介護講話（特別養護老人ホーム清風苑）

⑧酪農の魅力について（浜頓別町農業委員会）

※（　　）内は主催

５　成果と課題

地域との関わりや繋がりを実感し、よりよい社会の構築のために自分にはどんなことが必要か、将来に照らして考えようとする姿勢がみられた。生徒の指標となる客観的な評価方法の提示、タブレット端末の活用などが今後の課題である。また、単純に出前授業を多く設定することが大切ではなく効果的な活用が必要である。

６　おわりに

出前授業の実施には多くの手間が必要であるが、専門的な視点からの授業は教員も新たな角度から学ぶことが多く、新鮮な気持ちで授業に向き合うことができる。また、地方紙や町の広報誌などの取材が活発なため、それらを通して地域の方々に本校の教育活動に注目していただくことができる。これは、地域の活性化への一助にも繋がっていくのではないだろうか。これからの地域の将来を支えていく生徒に対して、地域と繋ぐ取組を今後も実践していきたい。

分科会報告

北海道江別高等学校　教諭　萬　谷　陽　子

【 研究協議のテーマ 】

協議の前半は、研究発表の提言を受けて『地域と連携した効果的な取り組みについて』、後半は、参加者側から出された協議したいテーマに基づき『観点別評価の実際と課題』または『ＩＣＴに係る取り組みと課題』について、各々が抱える課題の状況に合わせて協議していただいた。

１　地域と連携した効果的な取り組みについて

(1)学校の特性による違い

地域との連携に関しては、学校の規模や周辺環境の違い、生徒の状況、科目の特性等で実施しやすかったり、実施が難しかったりする。市町村立の学校や小規模校は協力も得やすく、更に、まちが教育活動に協力的であると話がスムーズに進みやすい。都市部の間口の大きい学校では、地域の特徴を出しにくく、連携の動きがとりにくいという声があった。また、定時制の学校では、連携相手と時間帯が合わずに実施が難しいという話が出ていた。

(2)地域連携の現状

地域連携に関しては、生徒が自分たちの生まれ育った地を理解するということで、学校教育のさまざまな場面で取り入れられている。勤務している学校により、家庭科の授業以外でも同じような連携をすでに行っていることもあるので、内容が重なるという悩みもあった。

連携に際しては、市役所・町役場、商工会議所等の公的な機関、地元企業、近隣大学や保育所、福祉施設等との繋がりからネットワークづくりをしていくケースが多い。

具体的な実践事例としては、保育所や高齢者施設訪問、特産品を用いた調理実習・商品開発、浴衣の着付け講習、認知症サポーター養成講座、手話点字講座講師体験、防災地域マップの作成等が挙げられた。また、刺繍を通したアイヌ文化の伝承、鹿肉のレシピ開発等、地域色が強い事例も紹介されていた。

対面が伴う実習活動はコロナ禍では実施が難しく、ＤＶＤ視聴等のＩＣＴ活用の授業展開で代替せざるを得ない学校が多かった。そのような中で、リモートを効果的に取り入れたかたちでの実施、生徒の代表者に交流させ、クラスで発表をさせるという、対面効果を生かしたかたちでの実施も報告された。また同様に連携する中で行われる調理実習についても、一人ずつ実施、クラスを半分に分けての実施、使い捨て容器を用いて一人ずつ試食、場所を数カ所に分けて試食する等、各学校独自での工夫が見られた。

(3)その他

生徒の体験的な活動の場を大切に思う気持ちはどの学校も共通しており、今後もコロナ禍を乗り切り、地域との連携を続けていく上で、つぎのような意見が出された。

○小中学校でどのような取り組みをしてきているかを知っておくことは大切である。

○同じような内容を扱う地歴公民科や保健体育科と重複する部分が多いため、他教科との教科横断的な連携も必要になってくる。

○地域連携については、学校のＰＲも必然的にしていることになるということを意識しなければならない。

○地域というものを広くとって、北海道全体として考えると、連携の方向性が見えてくる学校もあるのではないか。

○成果を焦らず、少しずつ質を上げたり、生徒が考え学ぶきっかけとしてとらえるという教員側の見方にゆとりが求められる。

2　ＩＣＴに係る取り組みと課題について

(1)使用環境について

今年度の入学生より全道的に電子端末(パソコン・タブレット)を導入し、学校生活の中で活用していくかたちをとっている。しかし、未だにタブレット環境が整っていない学校、Ｗｉ－ｆｉ環境が整っていない学校、一部教科での利用に留まっている学校等がある。また、端末が統一されていない学校もあり、指導者側の対応力が問われる。一方で、電子黒板や各種アプリケーションを積極的に取り入れ、学校全体としてペーパーレスとなっている事例も報告された。

タブレット環境が整っていない学校でスマートフォンを使って授業展開しようとしても、持っていない生徒がいたり、通信料の問題が発生してくる。

(2)活用事例について

コロナ禍においては、ＺｏｏｍやＧｏｏｇｌｅＭｅｅｔ等を使ってオンライン授業を行う機会が多いが、実施している先生方からはオンラインと教室での授業展開との並行のやりにくさが指摘されている。また、ＧｏｏｇｌｅＪａｍｂｏａｒｄの活用、ＧｏｏｇｌｅＦｏｒｍｓでの調べものやアンケート集計、ＧｏｏｇｌｅＣｌａｓｓｒｏｏｍに実習で使用する動画をアップして、予習・復習に活用させる等の実践事例が紹介された。

(3)今後の課題

ＩＣＴについては、指導者側に得手不得手があるため、教員の研修時間確保がまず課題として挙げられる。また、学校の環境整備(オンライン授業の環境整備を含め)が徹底されていないこと、家庭の環境差の問題、身につけさせたい力の問題がある。ＩＣＴを取り入れることで、データの振り返りはできるが、文章を読み解く力や知識の定着に課題があったり、実技科目は動画活用で時間短縮になるが、生徒が話し合いの機会を失い、教科として身につけさせたい力が身につかないという話もあった。ＩＣＴ活用との上手な付き合い方が今後の課題となる。

3　観点別評価の実際と課題について

(1)観点別評価導入の現状

各学校においては、校内統一されている評価の在り方に差があるのが現状であるが、多くの場合、教務部が大枠を規定し、ある程度は教科の裁量に任されている部分がある。

家庭科はもともと観点別評価を取り入れやすい教科ではあるが、他教科と足並みをそろえることで、評価がしづらくなったと感じている声もあった。尚、評価をするにあたり、家庭科教員が複数いる学校では評価にばらつきが出るので、評価基準を統一する必要がある。

(2)評価方法の現状と課題について

まず、観点別評価を実施するに当たって、我々の日常業務に影響が出ている。評価項目が少ないと、観点ごとのウエイトに片寄りが生じるので、小テストの実施、実習の振り返りレポートやワークシートの提出及び点検をこまめに行わなければならない。この先もこれらの業務を続けていくことに不安を感じる声もあった。

次に、定期テストの在り方についても議論がされており、３観点となった今回、「知識・技能」以外に「思考・判断・表現」をはかる問題を作成する必要性を問う声もあったが、現実的には成績処理等で時間に制限がある中で、これを今後定着させていくことは難しいという意見が出ていた。また、実技科目は、思い切ってペーパーテストを実施せずに評価するのも手であるという、経験に裏付けされた意見も出された。

最後に、実際に観点別評価を実施して、見えてきた部分に関して議論がされた。意欲のある生徒やそうでない生徒の指導方法について悩んでいる学校があるということ。また、生徒の取り組みや成果の高低が極端になり、総体的に評価が高くなることがあるため、それらの対応が必要だということが意見として挙げられた。

観点別評価については、ほとんどの学校が今年度より手探りで取り組んでいる状況である。まずは１年間やってみてから、いろいろな意見を出し合って学んでいく必要がある。

第７１回北海道高等学校家庭科教育研究協議会

講評

北海道教育庁学校教育局高校総体推進課高校総体式典係
主査　近　藤　麻理子

１　興部高校の荒谷祐子先生の提言について

地元の活性化のために地元の特産品を使った地産地消の料理レシピ集を作成するという、まさに、学習指導要領における家庭科の目標の柱書にある「生活に係る見方・考え方」を働かせた学習活動と言える。そして、魅力ある町づくりのため、地元の産業である漁業、酪農などの町を支える産業や、歴史や食文化について、SDGsとの関連を含めて考察されている点や、他教科と連携し、教科横断的に取り組むことも実践されている点については、生徒の「思考力・判断力・表現力」を育成するにふさわしい取組だった。「思考力・判断力・表現力等」を育成するためには、言語活動の充実が欠かせない。具体的な方法としては、荒谷先生が行ったグループでの話し合いや学習した内容を発表する、レポートの作成などがある。今後は、ポートフォリオを活用するなど ICT を積極的に活用した評価についても取り組むようお願いしたい。

２　浜頓別高校の奈良崎愛先生の提言について

家庭科の学習指導要領における「様々な人々と協働し、よりよい社会の構築に向けて、地域社会に参画しようとするとともに、自分や家庭、地域の生活を主体的に創造しようとする実践的な態度を養う。」という目標を踏まえた実践であった。特に、こども園や小学校に働きかけるなどした異校種間での連携のほか、学校の取組を各新聞社の記事として取り上げてもらうなどの工夫は、地域住民の学校の取組に対する理解を深めてもらい、協力を仰ぐ上でも効果的な取組だった。今後については、年間指導計画において、どの場面でこのような地域と連携した取組を取り入れるか、取り入れる際は、地域の課題を明確にしたうえで、どのような取組が必要かを考察するなどの工夫をお願いしたい。学習評価の実施に当たっては、生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し、学習したことの意義や価値を実感できるようにするなどの工夫が必要である。そのため、評価の場面や方法を工夫して、指導と評価の一体化を意識しながら指導の改善や学習意欲の向上を図り、資質・能力の育成に生かしていただきたい。

３　提言をされた先生方に共通する事柄

生徒や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容を教科等横断的な視点で、育成したい生徒の資質能力は何かということを明確にした上で年間指導計画等を作成していただきたいと言うことである。特に「主体的に学習に取り組む態度」の評価において、ノートやレポート等における記述、発言の内容により、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら、学ぼうとしているかどうかという意志的な側面を評価することが重要である。また、今回お二人の先生方の取組などは、学校家庭クラブ活動として年間指導計画へ位置付けすることが可能な実践である。家庭科の授業の一環として、授業の早い段階においてホームプロジェクトと、学校家庭クラブ活動の意義と実践方法について理解できるよう、家庭科の知識や技能を活用して実施することを説明し、学習の見通しが立てられるように指導願いたい。また ICT の活用について、生活に関わる外部の様々な情報を収集して活用することやデータの整理など指導の各場面において活用し、学習の効果を高めるようお願いしたい。

北海道高等学校長協会家庭部会調査研究委員会報告

北海道の小規模校における家庭科教育の現状と課題

北海道高等学校長協会家庭部会調査研究委員長
北海道月形高等学校長　宮　﨑　　円

1　はじめに

急速に少子高齢化が進む北海道では、ピーク時の1999年に245校あった道立高校は、本年度188校まで減少している。一方、広域分散型の地理的特性により、地元高校以外の高校への通学が困難な地域が多数存在している。このような背景から、道立高校（全日制）においては、１学年１～３学級の「小規模校」は102校と半数以上を占め、中でも１学年１学級の学校は55校に上っている。

本校も数年前までは、１学年２学級の高校であったが、急速な中卒者の減少、都市部高校への進学者の増加、ＪＲのバス転換等が相まって、この3年間の入学者は10数名で推移し、全校生徒36名の小規模校となっている。

このような状況の中で、教科家庭は、ともすれば必履修科目の家庭基礎２単位または、家庭総合４単位の履修のみとなり、その結果、時間講師や学校間連携の派遣教員や免許外申請による自校他教科教員による授業となりかねないところである。実際に、同規模の中学校においては、家庭科教諭のいない学校が大部分である。

しかし、高等学校においては、教科の専門性が十分に認められ、また、次の時代を支える子ども達の育成の要として、家庭科教員が学校や地域で大きな役割を担っている事を踏まえ、現状と課題について述べていきたい。

2　小規模校における家庭科教育の現状と課題

本道では、現在188校の道立高校のうち、本校を含め地理的に他校との統廃合が困難な１学年１学級かつ１クラスの人数が20名に満たない学校が27校ある。これらの高校は、「地域連携特例校」に位置づけられている。今年度の調査研究に向け、令和４年１月末に、上記小規模校（令和３年度は25校）の家庭科教諭ならびに生徒に対し、家庭科教育の現状についてアンケート調査を行った。

地域連携特例校には、普通科高校だけではなく、商業高校など家庭科教諭が配置されていない学校もあるが、25校中21校から回答が寄せられた。特に生徒からは683名分の回答を得ることができ、小規模校における家庭科教育の状況を知る一定の手がかりとなった。

(1)家庭に関する科目の設置状況

今年度の地域連携特定校27校の必履修科目は家庭総合（４単位）15校、家庭基礎12校となっている。家庭基礎履修の12校のうち６校は協力校からの家庭科教諭の派遣や商業等の専門高校のため専任の家庭科教諭が不在である。

一方、家庭科専任教諭がいる学校では、ほぼ全ての学校で「フードデザイン」を必修または選択教科として設置している他、「保育基礎」「生活と福祉」「ファッション造形基礎」「服飾手芸」や学校設定科目として「生活教養」等の科目を設置し、生きる力の育成が図られている。

(2)生徒の意識調査

①学年構成比

令和４年１月末に地域連携特例校の生徒に「家庭科の学びに関する意識調査を行い、21校683名より回答が寄せられた。３年生が家庭学習期間に入る直前であったにもかかわらず、各校の家庭科教諭のお陰で学年に偏りが生じることなく回答を得ることができた。

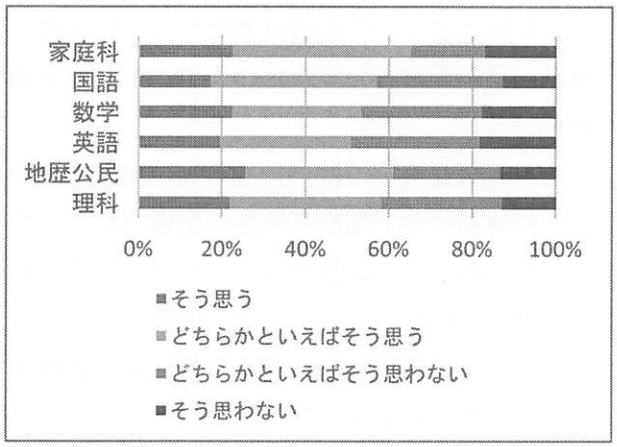
②学習状況調査比較

北海道では、高校教育の質の確保・向上の観

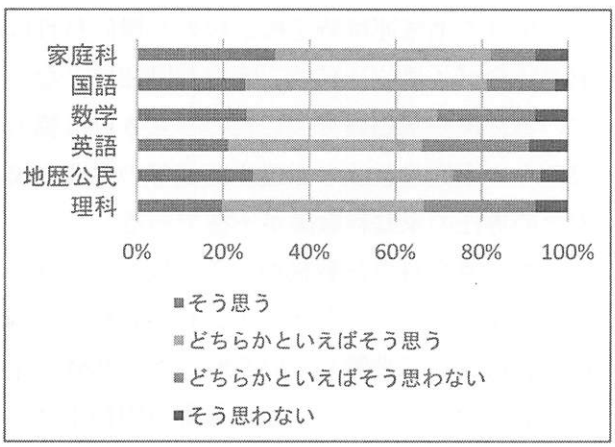
点から、基礎学力の定着や学習意欲の喚起を促すPDCAサイクルの構築・確立に向けた取組を推進することを目的に、１年生を対象に「未来を切り拓く資質・能力を育む高校教育推進事業」を行っている。

昨年度の１年生を対象に行われた各教科に関する学習状況調査結果をもとに、教科「家庭」を追加し比較してみた。

ア　それぞれの教科の勉強が好きだ。



イ　それぞれの教科の授業の内容はよくわかる。

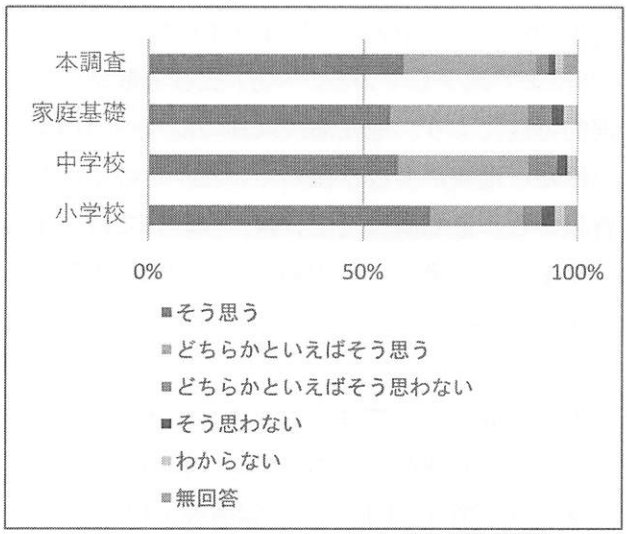


ア、イのどちらの項目に対しても「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と家庭科の学びを肯定的に捉えている生徒の割合が、他教科よりも高い結果となっている。小規模校においては、必履修科目だけではなく、そこで学ぶ生徒のニーズに合わせた選択科目が設置されていること、クラスの人数が少ないため教員の目が行き届き、学びの深化が図られている結果ではないかと推察される。

③学習指導要領実施状況調査との比較

国立教育政策研究所教育課程研究センターでは、平成27年に、次期学習指導要領改訂の検討のためのデータ等を得ることを目的に、高等学校の学習指導要領の検証ならびに学習指導要領の改善事項を中心に、各教科等の目標や内容に照らした生徒の学習の実現状況について調査研究を行っている。併せて、小学校・中学校の調査結果との比較を行っており、本調査の結果とも比較してみた。

ア　家庭科の学習をすれば、ふだんの生活や社会に出て役に立つ。



平成27年度の学習指導要領実施状況調査の結果と比較してみたが、小学生から高校生までどの年代をとってみても家庭科の学習をすれば、ふだんの生活や社会に出て役に立つと肯定的に捉えている生徒が90％に近い。特に本調査に協力してくれた本道の小規模校で学ぶ生徒に至っては、90％を超えている。

ぜひ、21世紀を生き抜く子ども達の気持ちに応えられる教育課程の編成や授業改善が図られるとともに、家庭生活をとおしてより良い地域社会を作り上げていくことができるような家庭科教育のより一層の充実が望まれる。

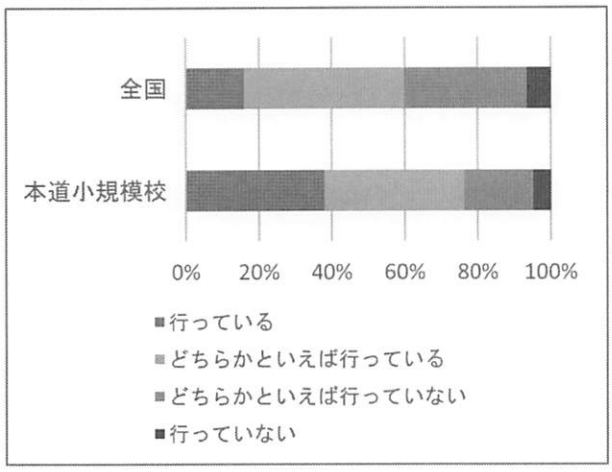
(3)　家庭科教諭の取り組み状況

国立教育政策研究所教育課程研究センターが平成27年に行った学習指導要領実施状況調査では、生徒の学びの定着状況や意識調査だけではなく、教師側の授業改善に資するための調査も行われており、本道小規模校の家庭科教諭にも同様のアンケートを実施した。

①学習指導要領実施状況調査との比較

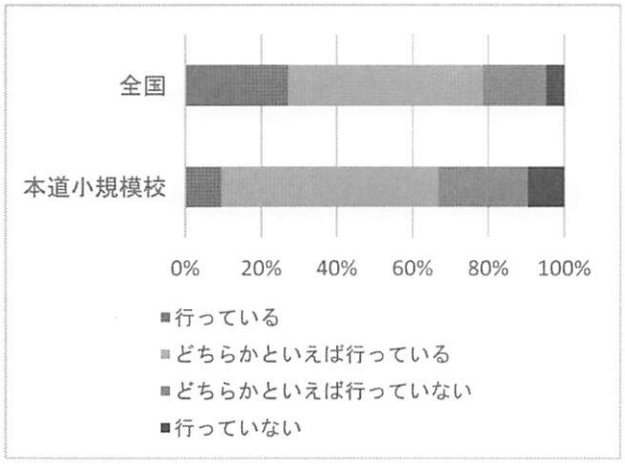
全項目のうち、全国との差が大きかったものについて次のとおり考察する。

ア　問題解決的な学習を取り入れた授業を行っていますか。



アの項目については、肯定的回答が全国では58.7%なのに対して、本道小規模校では76.2%と20ポイント近く高くなっている。令和４年度からの現学習指導要領では、家庭や地域及び社会における生活の中から問題を見いだして課題を設定し、解決策を構想し、実践を評価・改善し、考察したことを根拠に基づいて理論的に表現するなど、生涯を見通して生活の課題を解決する力を養うことが求められている。さらに、このような授業での取り組みが、家庭科の特徴であるホームプロジェクトや学校家庭クラブの充実へと発展することが望まれる。

イ　中学校技術・家庭科の内容と系統性を考えて授業を行っていますか。

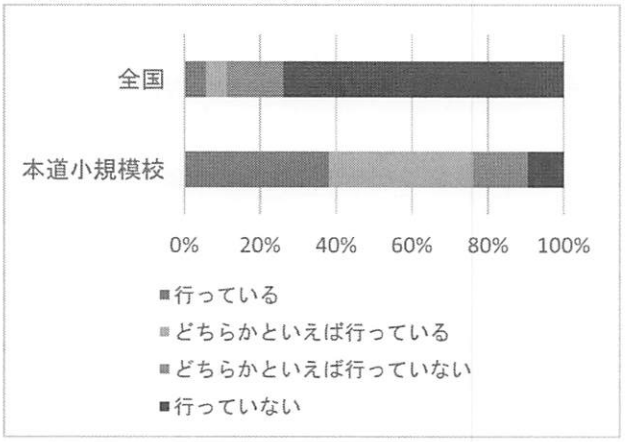


イの項目については、意外な結果になっている。肯定的回答が全国では77.1%に対して、本道小規模校では66.1%と10ポイント以上の差がある。特に、「行っている」という回答についてみてみると全国26.6%に対して、本道小規模校9.5%と大きく開きがある。本道小規模校の大部分は、地域における唯一の高校であり同一町内の小・中学校から進学している生徒が少なくない。令和４年度からの現学習指導要領においては、小学校・中学校・高校ともに「Ａ　家族・家庭生活」「Ｂ　衣食住の生活」「Ｃ　消費生活・環境」の三つの系統性の明確化を図ることとなっている。

ただ、一方では、地域の小中学校が小規模なため、家庭科専任の教諭が配置されておらず、家庭科教諭同士の連携という面では、十分な取り組みがなされていない。

ぜひ、同じ町内の小中学校と連携を図りながら、家庭科教育の系統的な取り組みの推進を図っていけるよう、校長協会家庭部会として課題を共有しながら働きかけていきたい。

ウ　地域の人材を活用した授業を行っていますか。



ウの項目については、今回の全国との比較の中で1番大きな違いが見られる結果となった。肯定的回答が全国での11%に対して本道小規模校では76.4%となっている。家庭科の授業をとおして地域とつながり、課題解決に向けた取り組みを行っている学校が多いことが推察される。今後も地域資源の授業への活用が大いに期待されるところである。

Ⅱ　令和４年度北海道高等学校
家庭クラブ連盟活動報告

令和４年度北海道家庭クラブの活動について

北海道高等学校家庭クラブ連盟成人会長
北海道札幌丘珠高等学校長　飯　田　知　男

１　はじめに

日頃から本連盟の活動に対しまして、ご理解とご支援を賜り、誠にありがとうございます。

家庭クラブ連盟は家庭科で学んだ知識・技術を家庭生活や学校・地域の改善向上に貢献するための実践的・体験的な学習を支援する教育組織です。全国連盟に関しては、昭和28年に結成され、現在、約1,400校・23万人の生徒が地域や学校で活動しています。全国の家庭クラブ員によるホームプロジェクトならびに学校家庭クラブ活動の発表の場として、「全国高等学校家庭クラブ研究発表大会」と文部科学省共催の「全国高等学校家庭クラブ指導者養成講座」を毎年開催しています。

ここでは令和４年度の北海道連盟の活動を中心に報告いたします。

２　全国指導者養成講座

７月21日、東京都代々木にある国立オリンピック記念青少年総合センターで開催された今年度の講座には、当別高校から顧問１名、生徒２名が参加し、１泊２日の日程で学校家庭クラブ活動の指導者としての研修を中心に実施されました。

３　全国研究発表大会

この夏、７月28・29日と、山形市で開催された全国高等学校家庭クラブ研究発表大会に参加してきました。この大会は第70回記念大会として開催され、全国の７つのブロックの予選を経て、「ホームプロジェクトの部」「学校家庭クラブの部」にそれぞれ７校ずつの研究発表がありました。

北海道からは、「学校家庭クラブの部」に札幌北高校が、「ホームプロジェクトの部」で札幌丘珠高校がそれぞれ研究発表を行い、２日目の審査の結果、「学校家庭クラブの部」で札幌北高校の『まちのクリエイターは私たち～「いつか」ではなく「今から」行動を～』と題した発表が「産業教育振興中央会賞」を受賞しました。この賞は、文部科学大臣賞に次ぐ、実質、全国準優勝に相当するものです。

講評によりますと、札幌北高校の研究は、自治体とも連携しながら、アンケート等も活用し、地域づくりにつながる評価と改善を行った素晴らしい内容であったとのことでした。

４　全道研究大会・総会

９月29日、旭川永嶺高校を当番校として、北海道高等学校家庭クラブ連盟研究大会及び総会がオンラインの形で開催され、大会及び総会は、道内12校から、96名の生徒、15名の顧問、そして多数の来賓・成人役員・審査委員の方々にオンラインにて参加いただきました。

研究大会に関しては、審査の結果、「学校家庭クラブ活動の部」で札幌北高校の『めざせ！未来のチェンジメーカー～私たちから変えていくジェンダーフリーな社会～』、「ホームプロジェクトの部」では江別高校 菅原さくらさんの『祖母の衣生活改善について』と題した発表が最優秀賞を受賞しました。

本研究大会の主管を務めていただきました上川・留宗支部、並びに、当番校の重責を担っていただきました北海道旭川永嶺高等学校の関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

５　おわりに

生活上の課題を設定し、解決に向けて生活を科学的に探究し、創造する家庭クラブ活動がますます重要となる中、この後とも本連盟への変わらぬご支援をお願いして、今年度の報告とします。

第６３回全国高等学校家庭クラブ指導者養成講座に参加して

北海道当別高等学校　家庭クラブ顧問　伊　藤　恵里香

１　はじめに

令和４年７月21・22日に、国立オリンピック記念青少年総合センターで３年ぶりに参集して行われた標記講座に、本校から次期道連盟生徒会長予定者の２年立石乙笑と２年佐々木舞弥、次期道連盟会長校顧問の私の３名が参加しました。第７波と見られる感染拡大により参加辞退の県や参加者の変更等もありましたが、久しぶりに行われた対面での講義や研究協議は、他府県の家庭クラブ活動を直接生の声で聴くことのできる大変有意義な時間となりました。

２　講座内容

本講座は共通で行われる体験講座と講演以外はクラブ員と顧問教諭に分かれ、別プログラムで行われました。

(1)講義

クラブ員は「学校家庭クラブ活動の充実に向けて」東京都の指導主事より講義や、東京都の取り組みについてご紹介いただきました。顧問教諭は文科省の調査官より「新学習指導要領の着実な実施を目指して～ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動の充実」についてご講義いただきました。

(2)クラブ員・交流会

「都道府県BINGO！」司会進行を全国生徒会長と副会長が行い、アイスブレイクとなるゲームを用いて自己紹介と県の紹介を行いました。この交流会のおかげで、クラブ員は緊張がほぐれた状態で次の分科会に臨めたようでした。

(3)顧問教諭・実践活動報告

岩手県立平舘高等学校佐々木教諭より学校家庭クラブ活動の報告をしていただきました。59年も続く紫根枕の制作、紫根染め活動、についてご説明いただきました。時代に合わせて伝承活動を行うことの重要さを再認識しました。

(4)体験講座

「美しい立ち居振る舞い～拝礼と袱紗」竹田礼法着物学院竹田久美子氏より、礼法を学びました。正しい拝礼の姿勢と台付き袱紗の使い方を実践しました。美しい作法、日本独自の「包む、巻く、結ぶ」伝統文化を正しく継承することの大切さを学ぶことができました。

(5)講演

「食文化の国際交流」キッコーマン株式会社梅本洋氏よりご講演いただきました。しょうゆの海外進出のお話から、他国の食文化との融合が新しいおいしさ、新しい価値を見いだしていくことにつながるとお話しいただきました。

(6)分科会及び報告

テーマは共通で「つづけよう　つながろう　これからの学校家庭クラブ活動」と題し、グループに分かれ研究協議を行いました。クラブ員はSDGsを意識し「活動の継続には何が必要か」を、顧問教諭はコロナに負けない活動の実践と工夫について協議し、PowerPointを作成して全体会で発表、共有しました。

３　おわりに

このような機会をいただけたことに感謝するとともに、この研修で得たことを今後の活動に還元していきたいと思います。また、現在北海道は、加盟校の減少が課題でもあります。約３分の２の学校が家庭クラブに加盟している県もあります。ホームプロジェクト・家庭クラブ活動は専門学科だけではなく、全学科の家庭科に位置づけられています。ぜひ、１校でも多くの学校に加盟していただきたいと願っています。

第７０回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会
北海道代表出場校として　ホームプロジェクトの部

北海道札幌丘珠高等学校　教諭　佐　藤　弘　子

令和４年７月28日（木）、29日（金）に山形県山形市の山形テルサで開催された標記大会に、北海道代表として、発表者３年種市心愛さんが補助者の田中伊織さんと共に参加し、研究発表を行いました。

研究テーマは、「我が家の料理改革！～無駄をなくそう～」で、１年家庭基礎の課題学習として取り組んだものを継続・発展させた内容です。

食材を使い切るなどゴミを減らして無駄をなくし、我が家の料理を改革したいと考え、研究を進めました。まず、家庭基礎で学んだ食料問題と我が家の食生活を比較して食材の無駄に注目し、野菜の切れ端や皮を使ったスープ、人参と大根の皮のふりかけ、大根の葉を使ったポタージュを作りました。普段は捨てているものでも工夫しだいでおいしい料理ができることがわかり、ゴミも減りましたが、課題解決のためには日常的に継続することが大切であること、無駄のない料理は、食材の使い方だけでなく、食料の生産・輸送・廃棄にかかるエネルギー、熱源や水の使い方などにも目を向ける必要があること、環境問題やSDGsとも関りがあることに気付きました。そこで、調理方法や献立を工夫し簡単にできる料理を中心にレパートリーを増やすこと、道産食材を使う料理や時短料理、冷蔵庫での食材管理や食器洗いの工夫を新たな課題として実践を継続することにしました。短時間で簡単にできる人参の皮のきんぴら、普段よく使うブロッコリーの茎を使ったスープ、ミルフィーユ鍋とスープで白菜を使い切るメニュー、道産じゃがいもを使ったピザ、電子レンジを使い短時間加熱でかぼちゃ料理などを作りました。さらに冷蔵庫内の食材が一目でわかるようにホワイトボードを活用して食材の使い残しをなくす、水の使い方の工夫として油を拭き取ってから食器を洗うなど様々な視点から実践しました。この研究をとおして、今まで捨てていたものを有効に活用することができ、驚きや発見が多かったようです。また、視野が広がり、考え方や実践力が高まったようです。

審査員の先生方からは、料理実践に前向きに挑戦していること、料理の評価を○△×などでわかりやすく示していること、中間評価から次にやるべきことが明確になっている点が良かったと講評をいただきました。

発表を終えて数か月経ちますが、今後も研究を続け多くの人に伝えていきたいと述べており、改めて研究の成果と生徒の成長を感じました。

ホームプロジェクトの実践には家族の理解や協力が必要ですが、取り組みによって家族の意識や行動がどのように変化し、家庭の生活の充実や向上につながったのかがわかるようなまとめ方をすることが大切です。今回の研究では、作った料理に対して家族から感想やアドバイスをもらっていましたが、研究をまとめるにあたって家族の意識の変化や家庭生活の充実向上という視点を強調させるべきであった思います。

最後になりますが、全国大会出場にあたり、多くの皆様に心から感謝を申し上げ、報告といたします。

第７０回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会
北海道代表出場校として　学校家庭クラブ活動の部

北海道札幌北高等学校　教諭　松　本　奈　巳

令和４年７月28日（木）、29日（金）に山形県山形テルサにおいて、「未来へと 希望の紅花（べにばな）を咲かせよう　やっしょまかしょ！　あふれる笑顔！」をスローガンに標記大会が開催され、生徒７名と参加しました。３年振りのリアルでの大会は、感染者数が増加してきた時期と重なり、人数制限も行いながら、きめ細やかな感染症対策が取られる中での実施となりました。そのような中でも、発表者・補助者ともに落ちついて発表に臨むことができ、学校家庭クラブ活動の部において産業教育振興中央会賞を受賞することができました。

テーマを『まちのクリエイターは私たち～「いつか」ではなく「今から」行動を～』とし、持続可能なまちづくりを目指して取り組んだ本研究ですが、コロナ禍で部活動に大きな制限がかかっていたことや、まちづくりという大きな概念を自分達の課題として整理する必要があり、テーマや課題、実践内容の設定には予想以上に時間がかかりました。それでも、丁寧で地道な聞き取り調査やアンケート分析を行い、方向性を導き出すことで、校内では、札幌市防災協会の方のアドバイスを受けて作成した防災テストの実施や、“まちづくりのためのAction”を形にする「One Action」に結びつけました。校外では、地域の児童館との連携により、家庭にもその内容をフィードバックできる「防災すごろく」を実施するなど、本校の家庭クラブの合言葉である[自分事として考える]を形にした実践となりました。講評では、自治体との連携やアンケートから課題をあぶり出し、具体的な実践につなげている点や、実践したことの評価・改善を繰り返し、研究が深まり、自主的な力が身についていった点を評価していただくことができました。

全国大会の発表からは、高校生の豊かな発想力と行動力で、生活や地域社会をより良くしていこうという前向きさを感じました。家庭の中で、授業や部活動をはじめとした学校生活の中で、そして地域・社会の中で、家庭クラブの活動は生徒の自己効力感を育み、多様な他者と協同しながら、自立した生活を主体的に営む力になると思っています。

最後になりますが、全国大会出場にあたりご協力くださった関係機関や皆様に心から感謝申し上げ、報告といたします。

第７１回北海道高等学校家庭クラブ連盟研究大会・総会を終えて

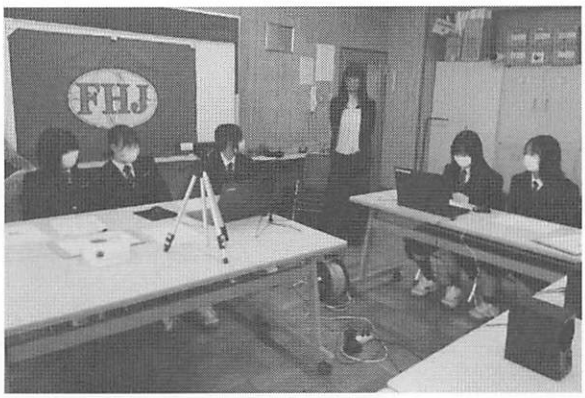
令和４年度北海道高等学校家庭クラブ連盟研究発表大会・総会当番校
北海道旭川永嶺高等学校　教諭　横　野　　泉

今年度は９月28日、29日に、旭川永嶺高校が担当校となり、オンラインで開催しました。

加盟校12校の生徒、顧問、成人会長と、来賓を含め119名の参加となる中、５校が学校家庭クラブ活動の部、４校がホームプロジェクトの部において、日頃の活動の成果を発表しました。また、家庭クラブ総会は、事務局校の札幌丘珠高校、当別高校により進められ、指導者養成講座報告では、当別高校の生徒による報告が行われました。当日は、発表の際の画面の切り替えや、操作の間違いをしないようにと、オンラインならではの緊張感がある中、パワーポイント資料を共有する形で発表し、交流することができました。また、他校の活動の状況を知ることで、自分たちの活動に刺激を受け、視野を広げることができました。

大会結果は右に掲載されたとおりですが、最優秀賞に選ばれた、家庭クラブ活動の部　札幌北高校家庭クラブと、ホームプロジェクトの部　江別高校 菅原さくらさんは、来年８月に実施される全国大会に北海道の代表として出場することとなりました。

次年度は厚真高校が大会を担当する予定です。各校との交流を楽しみにしながら、家庭クラブ活動を充実させていきたいと思います。



【大会概要】

９月28日（水）

時　間	内　容
12:30～	接続準備
13:30:～	発表リハーサル （研究発表、生徒研修）
16:00～	顧問打ち合わせ

９月29日（木）

時　間	内　容
8:30～	接続準備
9:00～10:00	リハーサル
10:00～	開会式
10:30～	研究発表（ＳＰ・５校）
	昼休憩
13:00～	生徒総会（札幌丘珠高校、当別高校）
13:30～	指導者養成講座報告（当別高校）
14:00～	研究発表（ＨＰ・４校）
15;20～	生徒研修「私たちの学校自慢」
16:00～	閉会式
終了後	顧問会議

【大会結果報告】

（学校家庭クラブ活動の部）

支部	題目　学校名	賞
上川留宗	アイヌ文化の発信　Vol.4 ～体験して「いいね」を見つけよう～ 旭川永嶺高校　家庭クラブ	協力賞
後志	じゃがいも革命 倶知安高校　　家庭クラブ	普及賞
日胆	みんなでサポーター！ ～支え合う社会のために～ 厚真高校　　家庭クラブ	優秀賞
ｵﾎｰﾂｸ	じゃがいもで地域交流 清里高校　　家庭クラブ	協力賞
石狩	めざせ！未来のチェンジメーカー ～私たちから変えていく ジェンダーフリーな社会へ～ 札幌北高校　　家庭クラブ	最優秀賞

（ホームプロジェクトの部）

支部	題目　学校名　発表者名	賞
石狩	物を大切にしてゴミを減らそう 当別高校　２年　立石　乙笑	努力賞
石狩	祖母の衣生活改善について 江別高校　２年　菅原　さくら	最優秀賞
石狩	「睡眠の質を向上させよう！ ～家族の健康のために～」 札幌丘珠高校　２年　葛西　星那	優秀賞
根釧	食品ロス減らそう大作戦！ 釧路明輝高校　２年　根本　留奈	実践賞

Ⅲ　令和４年度北海道家庭科
技術検定委員会活動報告

家庭科技術検定の実施について

北海道高等学校家庭科技術検定委員長
北海道三笠高等学校長　藤　田　博　史

日ごろから、専門委員の先生方のご尽力や各校のご理解とご協力に、心から感謝を申し上げます。

全国の技術検定は、令和２年度に発足60周年を迎え、コロナ禍の延期により今年度、周年記念事業が実施されました。５月に行われた全国の専門委員会では北海道増毛町出身で洋食料理家の三國清三シェフによる特別記念講演が開催され、記念誌の発行、さらに家庭科技術検定の実技に関するＤＶＤが令和５年４月に家庭部会会員校及び検定実施校に配布される予定です。

令和４年度北海道の家庭科技術検定の状況については次のとおり報告いたします。

1　事業報告

(1)専門委員

役　職	学校名	氏　名
全国・北海道(洋服)	江　別	狩野　千賀子
全国・北海道(和服)	函館大妻	笹森　美絵
全国・北海道(食物)	三　笠	斎田　雄司
全国・北海道(保育)	函館大妻	玉森　咲月
全国・北海道(保育)	当　別	足達　しずか
北　海　道　(被服)	江　別	秋田　貴子
北　海　道　(食物)	名寄産業	中森　真也
北　海　道　(食物)	三　笠	鈴木　多恵
北　海　道　(保育)	当　別	尾崎　由貴

(2)諸会議

①常任委員研究協議会　R4. 4. 14
②第１回専門委員研究協議会　R4. 4. 14
③第２回専門委員研究協議会　R4. 8. 3
④家庭科技術検定評価研究協議会・検定委員養成講座　R4. 8. 4
⑤第３回専門委員研究協議会　R4. 11. 29

今年度の、技術検定評価研究協議会及び検定委員養成講座は江別高校を会場に、全道各地からの参加者が実り多い研鑽を積みました。

2　被服製作・食物調理検定受検者数の推移

級	種目	R４	R３	R２	R１	H30
4級	被服	132	145	151	159	197
	食物	485	594	581	708	1,037
3級	被服	93	96	108	123	146
	食物	297	373	356	427	574
2級	和服	32	44	55	50	60
	洋服	34	38	47	46	56
	食物	146	144	148	175	217
1級	和服	39	45	50	56	40
	洋服	34	35	40	44	26
	食物	99	86	135	149	165
合計		1,391	1,600	1,671	1,937	2,518

3　保育検定受検者数(14 校　合計 1,110 名)

級	音楽・ﾘｽﾞﾑ表現技術	造　形表現技術	言　語表現技術	家庭看護技　術
4級	140	228	168	132
3級	30	101	67	55
2級	26	23	23	26
1級	22	25	21	23
合計	218	377	279	236

4　検定実施校数の推移

	R4	R3	R2	R1	H30
実施校数	32	30	51	51	42

家庭科技術検定全国専門委員会に参加して（被服）

全国専門委員（被服）
函館大妻高等学校　教諭　笹　森　美　絵

1　はじめに

令和４年度家庭科技術検定全国専門委員会が、５月17日（火）・18日（水）の２日間にわたり、ホテルエドモントにおいて開催されました。全国から指導主事の先生をはじめ、専門委員の先生方140名の参加がありました。北海道からは江別高校の狩野千賀子教諭（本部委員）、三笠高校の斎田雄司教諭（食物）、当別高校の足達しずか教諭（保育）、函館大妻高校から笹森（和服）の４名の参加となりました。

2　全体会

１日目は、事務局長より日程の説明等があり、２日目は各分科会の報告がありました。事務局からは、周年記念事業などについて報告がありました。その後、「家庭科技術検定の指導の充実に向けて～新学習指導要領の趣旨を明確にした技術検定の指導～」と題して、国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官の山村季代様より講話がありました。学習指導要領の改訂について、共通教科「家庭」の改訂のポイント（実践的・体験的な学習活動）や目標の改善など、専門教科「家庭」では改訂のポイント（生活産業を通して、地域や社会の生活の質の向上と社会の発展を担う職業人を育成する）や目標の改善などを説明していただきました。

また、指導計画作成上の配慮事項に関して「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善により、質の高い学びを実現し、全ての生徒の可能性を引き出すなど、一連の学習過程の中で効果的にICTを活用していくと、より効果的になるとのことでした。最後に学習指導要領の趣旨を明確にした技術検定の指導ということで、生徒への効果的な指導・外部への広報・教師の指導力の向上の必要性をお話しいただきました。

3　分科会

被服製作分科会では、令和３年度委員会報告が作問部と研究評価部より報告があり、研究協議として令和４年度検定及び令和５年度以降の検定について作問部と研究評価部より説明がありました。作品評価では、評価の統一性を図るためグループに分かれ、１級から４級までの作品を見て話し合いながら採点をしました。２日目の分科会では、班によって採点に大幅な差が出た点を重点的に解説していただき、評価の基準を確認することができました。分科会の終わりに指導主事より、「家庭科の授業の中で、実技の時間が少なくなってきていること。１級の指導ができる教員を育てていかなければならない。家庭科技術検定では物を作る喜びはもとより、集中力や段取りできる判断力も培われる。家庭科で学んだ基礎基本は生活にも活かされるため、技術検定を通してしっかりと指導してほしい。」との言葉がありました。

4　おわりに

全国専門委員会へ参加して、検定の受検者が減少傾向にあることは全国の先生方のお話で理解できましたが、実技の時間が取れないことや、技術不足で指導できないことに問題があると感じました。技術検定の必要性は十分にわかってはいるものの、できないのが現状のようです。全国専門委員会で学んだことを周知させ、家庭科技術検定を広げていくために専門委員の先生方と協力して検定委員養成講座の内容を精査し、多くの先生方に参加していただけるよう考えていきたいと思いました。

家庭科技術検定全国専門委員会に参加して（食物調理）

全国専門委員（食物調理）
北海道三笠高等学校　教諭　斎　田　雄　司

1　はじめに

令和４年度の家庭科技術検定全国専門委員会が、５月17日（火）・18日（水）の２日間にわたり、東京都のホテルメトロポリタンエドモンドにおいて開催されました。コロナ禍において令和２年、３年度は中止となり、久しぶりの開催でした。本校は北海道技術検定代表理事校として初めての参加となりました。

本会は、家庭科技術検定の評価や運営について共通理解を深め、技術検定の円滑で適正な実施を図るとともに家庭科教育の充実・振興に資する目的で開催をされました。17日（火）は開会式と全体会及び分科会、記念特別講演が、18日（水）は分科会、全体会が行われ、最後に国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官の山村季代様より講話がありました。

2　60周年記念特別講演

北海道増毛町出身のオテル・ドゥ・ミクニ オーナーシェフ 三國清三様による講演「三國の食育について～味覚は心と気持ちを豊かにする～」が開催されました。三國シェフはこれまで小学生や中学生を対象に味覚の授業やキッズシェフコンテストなど、食育に熱心に取り組まれており、日ごろの学習指導に大いに役立てたいと感じました。中でも味覚の成長が五感の成長を促し、他者に対して思いやりをもって接することができる人間を育てることに繋がるということが印象に残りました。

3　分科会

食物調理分科会では、令和３年度委員会報告が作問部と研究評価部より報告があり、研究協議として令和４年度検定及び令和５年度以降の検定について作問部と研究評価部より説明がありました。

令和４年度検定については、第55回・第56回の検定指導要項及び評価基準について、細かく実施要項に記載の内容の確認が行われました。また、令和４年度前期（第55回）の指定調理課題であるマセドアンサラダ（３級）、二色ゼリー（１級）のできばえの評価基準が写真で共有されました。一つ一つの作品の出来栄えに対して配点が示されたので、大変参考になる資料を提供いただきました。

その後質疑応答集に対する解説がありました。実施要項と合わせて、今回共有された質疑応答集を熟読し、各校においては検定実施を行っていただきたいと思います。

分科会の最後に、指導助言として「技術検定で目指しているものは何かを理解すること。伝統的な調理方法、基礎的基本的な調理方法を十分に理解させたうえで、自身のライフスタイルに合った便利なものを活用させることが必要。技術検定を通して自身の足りない所を明らかにすることで、主体的に学ぶきっかけとなること。授業者が生徒に自宅で課題をやらせてもやってこないのは、その課題が、生徒自身がやりたいことになっていない。興味関心を高められていない。それであれば生徒の問題ではなく、指導者の指導方法の問題であり、授業改善が必要である。」とお言葉を頂きました。

4　おわりに

全国専門委員会へ参加して、食物調理技術検定の指導の留意点と評価の観点を十分に理解することができました。北海道内の検定実施校に対し、学んだことを十分に周知させていきたいと思います。

家庭科技術検定全国専門委員会に参加して（保育）

全国専門委員（保育）
北海道当別高等学校　教諭　足　達　しずか

1　はじめに

令和４年度の家庭科技術検定全国専門委員会が、５月17日（火）・18日（水）の２日間にわたり、東京千代田区ホテルメトロポリタンエドモンドにおいて開催されました。コロナ禍において令和２年、３年度は中止となり、久しぶりの開催となりましたが人数制限のため、北海道からは本部役員として運営に携わる北海道札幌東陵高等学校の今多靖子教諭、専門委員として私が参加し、技術検定の評価の統一を図ることを目的に、方法や運営の在り方について研究協議が行われました。

2　全体会

17日（火）は、開会式・全体会・60周年記念特別講演・分科会。翌18日（水）は分科会・全体会が実施されました。１日目の全体会では、来賓挨拶として櫻井純子様、特別記念講演はオテル・ドゥ・ミクニのオーナーシェフである三國清三様の講演、２日目の全体会では文部科学省初等中等教育局の山村季代調査官を始め、来賓の方々からご挨拶をいただきました。

3　評価講習会

(1)音楽リズム表現技術

各級の実技を実演で紹介し、評価について詳しい解説があり、歌唱は歌詞を理解すること、ピアノ演奏は楽譜をよく見て、曲想を理解して練習することや合否の判定が難しい生徒をどのように評価するか、歌い直し、弾き直しについての説明、歌唱・演奏共に日頃から笑顔を意識した練習が大切であるというお話しがありました。

(2)家庭看護技術

各級の評価の観点や得点の解説を動画を用いて事例を挙げて指導方法など説明がありました。評価基準・実施上の注意を確認し、用具の準備等を整えること、技術の習得だけでなく親になる可能性を重視し、愛着の重要性や子どもの気持ちに寄り添った適切な声かけを意識した指導についての補足がありました。

(3)言語表現技術

４級～１級の実施について解説がありました。絵本の扱いについては折り癖を付けることの重要性、持ち方とめくり方の注意点についての説明があり、各級共に練習方法として丁寧にはっきりと恥ずかしがらずに大きな声で繰り返して読む、その練習は目の前に子どもがいるということを意識して行うことの重要性についてのお話しがありました。

(4)造形表現技術

各級の複数の生徒作品画像を用いた得点の解説と解説に用いられた生徒の作品が展示されており、実際に見て、得点の基準を理解することができました。日頃から身のまわりにあるものを観察し、製作につなげることが大切であるというお話しがありました。

4　指導助言

委員長の都立東村山高校富川麗子校長からは評価の目を揃え、公平な評価ができるように研修を深め、各都道府県での伝達講習の必要性についてご助言いただきました。

5　おわりに

全国専門委員会に参加し、全国から集まる先生方から多くの刺激を受け有意義な時間を過ごすことができました。また、検定に向けた自分自身の課題を見いだす機会ともなり、指導方法の工夫をしていきたいと思いました。

令和４年度北海道高等学校家庭科技術検定評価研究協議会・検定委員養成講座実施報告

北海道家庭科技術検定事務局
北海道三笠高等学校　教諭　斎　田　雄　司

１　はじめに

８月４日（木）北海道江別高等学校を会場に令和４年度北海道高等学校家庭科技術検定評価研究協議会･検定委員養成講座を開催しました。全道の高等学校の家庭科教諭及び実習助手32名が参加され、技術検定の指導方法・評価講習を受講いただきました。

今年度は午前に食物調理および保育の講座、午後に被服製作と保育の講座から１～２講座を選択いただき実施をしました。

２　評価研究協議会・検定委員養成講座

(1)食物調理

専門委員の三笠高校 鈴木多恵教諭、名寄産業高校 中森真也教諭の指導で19名の先生方に対し講習会を実施しました。実施内容は４級検定試験の実技課題である「きゅうりの半月切り」、３級検定試験の指定調理課題である「かきたま汁」「豚肉と野菜の炒め物」を学習していただきました。どちらの課題も生徒と同じ制限時間内で調理を体験していただき、出来上がった作品は複数人で評価基準に基づいて評価を行い、評価の目合わせを行いました。

(2)被服製作

専門委員の函館大妻高校 笹森美絵教諭の指導で９名の先生方に対し講習会を実施しました。実施内容は４級検定試験の実技課題である「基礎縫い」を学習していただきました。出来上がった作品は複数人で評価基準に基づいて評価を行い、評価の目合わせを行いました。

(3)保育

専門委員の当別高校 足達しずか教諭、尾崎由貴教諭、函館大妻高校 玉森咲月教諭の指導で午前と午後を合わせて27名の先生方に対し講習会を実施しました。実施内容は４級検定試験の造形の実技課題である「折り紙」を学習していただきました。

３　参加者アンケートより

アンケートに回答された方全員から、講座の指導について「分かりやすかった」「とても分かりやすかった」と感想をいただきました。食物調理の講座については、生徒に何をどのように指導すればよいかを体験的に知ることができた。被服製作の講座については、順番や巡回等丁寧に指導してもらえた。自己研鑽のためにも３級の制作も専門委員の先生に伺いながら学んでみたかった。保育の講座については３級あるいは造形以外の内容も知りたい。作品に対して合格に向けてのアドバイスを頂けて、生徒にどのように指導すれば分かりやすく感じてもらえるかが分かった。指導のポイントを教えていただけるのはありがたかった。などおおむね良い評価をいただきました。

４　次年度の実施について

評価研究協議会・検定委員養成講座は公正公平な検定実施及び評価を行っていただくために毎年実施をしております。検定実施校の担当の先生方は是非ともご参加をご検討ください。

検定委員養成講座は各校で比較的取り組みやすい３・４級を中心に実施をしてまいります。２級以上実施を検討されている学校は専門委員の紹介及び実技試験の試験監督派遣を行いますので事務局へお問い合わせください。

今年度実施の反省を活かして次年度の実施の計画をしてまいります。多くの先生方のご参加お待ちしております。また参加後は検定試験の導入をぜひともご検討ください。

Ⅳ　家庭科教育に関する報告

第１０回北海道高等学校長協会家庭部会意見・体験発表大会を開催して

事務局
北海道江別高等学校　教諭　鈴　木　朋　美

１　大会を運営して

今年度で10回目を迎えた家庭部会意見・体験発表大会は、『全道の高等学校で家庭・福祉を学んでいる生徒が、日頃の学習で学んだことの成果について、意見や体験を発表するとともに、生徒相互の交流をとおして、「生きる力」を育み、家庭・福祉教育の充実を図る』ことを目的に実施しています。

新型コロナウイルスの感染拡大により、昨年度はオンラインで開催した大会ですが、今年度は対面で実施することができました。

当日は北海道月形高等学校宮﨑円校長先生をはじめとする３名の校長先生方が審査を行い、オンラインで参加した２校を含む９校が発表を行いました。

いずれの内容も、「家庭・福祉」の授業や実習・体験・ホームプロジェクトなどをとおして、自分の進路や夢・生き方につなげた発表で、直接参加者自身の声を通して聞くことができました。今年度は専門学科・総合学科からの参加だけでしたが、多様化した社会の中で、主体的に家庭や地域の生活を創造する能力と実践的な態度を育てる家庭・福祉教育の「生きる力」を感じることができました。生徒同士の直接の交流はほとんどできませんでしたが、各校の様子や取り組みを紹介する交流会も実施することができました。

３年ぶりの対面での大会で、オンラインでの同時配信も行いながらということで不慣れなことも多く、ご迷惑をおかけしましたが、今年度参加いただいた各校の生徒の皆さん、ご指導をいただいた先生方には深く感謝申し上げます。来年度はより多くの生徒が参加できるよう、一日も早いコロナ禍の収束を願うとともに、ご理解・ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

２　大会参加者

(1)置戸高校　佐々木そよか
『ただ、そばにいるだけで
～置戸町に降り注ぐ、太陽のような笑顔～』

(2)真狩高校　武石　にこ
『製菓衛生師でもある調理師に』

(3)当別高校　森山　衣織
『家政科だからこそ得られた経験と学び』

(4)余市紅志高校　中島　あずさ
『高齢になっても生き生きと過ごすために』

(5)名寄産業高校　川合　美咲
『暮らしの中での助け合い
～誰もが幸せに暮らせる社会を目指して～』

(6)三笠高校　幸池　夏旺
『私の心が決めた場所』

(7)江別高校　旭岡　実海
『夢をかなえるために』

(8)剣淵高校　惣田　萌花
『幸せを未来へ』

(9)石狩翔陽高校　小村　乙葉
『私の目指す保育士像』

３　大会結果

最優秀賞（産振推薦）置戸高校 佐々木そよか
優秀賞（産振推薦）三笠高校　幸池　夏旺
優秀賞　　余市紅志高校　中島あずさ

第１０回北海道高等学校長協会家庭部会意見・体験発表大会に参加して（家庭部会）

発表者　北海道三笠高等学校　３年　幸　池　夏　旺
指導者　北海道三笠高等学校　教諭　明　石　絵　美

１　生徒原稿

ある日、ふとテレビを見ていると、三笠高校を紹介している様子が映っていた。三笠高校は調理や製菓に関する専門知識や技術について学べる、道内唯一の食物調理科単科の公立高校である。小さい頃から料理に興味を抱いていた私は、このテレビ放映をきっかけに三笠高校に入学することを決意した。

いざ高校生活が始まると、様々な苦悩、戸惑いばかりであった。調理についての知識を学びながら、包丁の扱い方や火の使い方などの基本的な技術を調理実習で身に付ける。今までとは全く異なる生活に慣れることが何より大変で、不安な気持ちが大きくなっていた。食のプロフェッショナルになるため覚悟していた道ではあったものの、甘くはない現実に打ちのめされそうになっていた。だが、調理師の実技試験をきっかけに、前へ向かう覚悟を固めることが出来た。一度目の試験で合格出来なかったことで目が覚めたのである。私は再試験に向けて毎日のように練習を重ねた。そしてこの経験から気づいたことがあった。それは目標達成に向けてよく考え、地道に積み上げることの大切さである。私は現状の自分の技術がどれだけ合格から離れているのかを把握するため、包丁の動かし方や自分の立つ姿勢などを確認し、次の練習で改善して取り組み、これを何回も繰り返すことによって日増しに上達し、合格することができた。

三笠高校で気付いたことはこれだけではない。責任をもって仕事に取り組むことの大切さは、部活動で高校生レストランを運営する中で気付くことができた。私が所属している調理部では、木・金曜日に料理の仕込みを行い、週末にレストランを開店し、営業を行う。ある時、私は仕込みの作業で、切り方に不備があったことが発覚してしまった。そのため次の作業を行う人に負担をかけてしまい、その仕込みが円滑に進まなかった。自分の仕事によって、お客様が喜んでくれるかどうかが決まるということを、先生や先輩方からも改めて教えていただいた。このような経験を通し、私は自分の仕事に責任を持つ重要性を自覚して、次からはこんな失敗は絶対にしないと心に決め、同じミスをしなくなった。

これらのことを学べた三笠高校での学習を通して、私が将来どんな場所にいて、どのような姿になっていたいのか考え、決めた事がある。それは、管理栄養士として仕事に従事し、より多くの人の健康を守れるような人になることである。現代では生活習慣から不健康になっている人も多いと知った。私自身、肥満に苦しんでいた時期もあり、とても他人事のようには思えなかった。管理栄養士を続けていくということは、多くの人の健康を守る責任を背負い続けることや、改善まで長く治療をし続ける努力をすることが必要となる。三笠高校で学べたこと全てが、これからの仕事に繋がっていく。そう確かに思える気持ちを胸に、いつか人々を幸せにできる、そんな仕事ができるようになるまで、これからも歩んでいきたい。

２　生徒を指導して

生徒は３年間を客観的にふり返ることが出来、有意義な取り組みが出来たようです。大会では他校のさまざまな取り組みを知り、また交流を通じて、授業では味わうことの出来ない刺激を受けることができたと思います。このような機会をいただき感謝いたします。

令和４年度北海道高等学校産業教育意見・体験発表大会に参加して（福祉科に関する学科発表）

第１０回北海道高等学校長協会家庭部会意見・体験発表大会最優秀賞受賞
発表者　北海道置戸高等学校　２年　佐々木　そよか
指導者　北海道置戸高等学校　教諭　三　浦　玲　奈

１　生徒原稿

「すごい！手話で自己紹介してる！」職員の方の姿を見て、「私も授業で手話や指文字を習ったから、やってみたい！ささき　そよかです。よろしくお願いします。」利用者様から拍手喝采を浴びたのは、初めて介護施設を見学したときでした。「チャレンジしてよかった！少しでも多くの人に私の名前を知ってもらえて嬉しいな！」私が一生懸命学んだ知識が活きた瞬間でした。

見学の最後に、レクに参加させていただきました。もっとレクを盛り上げたい！そんな想いから、「Ｆさん、どうすればあそこの高いポイントを狙えますか？」「皆さん応援お願いします！」私は利用者様に声をかけて回りました。すると、利用者様から、「ここにコツがあるんだよ。」「頑張って一番の記録を越してね。」「私はあそこまで飛んだのよ。飛ばせるかしら？」利用者様の話し声や笑顔が伝播し、フロア内がますます活気に溢れました。私も嬉しくて笑みがこぼれました。「これだ！こんなふうに利用者様に、笑顔と幸せの花を咲かせたい！私がそばにいて、皆を明るく照らす存在になりたい！」この時、私の夢は、明確な目標へと変化していったのです。

そんなある日、親しくなった町民のＫさんとスーパーで偶然会い、一緒に帰っている時でした。「そよかちゃん、私の話聞いてくれる？私のお父さんはね、脳血管性認知症だったの。」突然Ｋさんが話し始めました。「毎日書いていた日記も書かなくなって…認知症になってもね、家族から貰ったメッセージカードだけは大事に胸ポケットに入れていたの。でもね、やっぱり認知症って残酷。大切なものをどんどん奪っていくから。」私は「そうだったんですね…」としか返すことができませんでした。「それでも介護士さんのおかげでなんとかやってこれたよ。介護士さんってすごいねぇ。そよかちゃんも介護士さんを目指しているんでしょ？頑張ってね！話を聞いてくれてありがとう。とっても救われたよ。」

皆さん、大切な人を今思い浮かべてください。その人が自分を忘れていく…知らない誰かになっていく…大切なその人が…。そんなことを想像すると、皆さんはどんな気持ちになりますか？何気なかった幸せな日々も、素敵なたくさんの思い出も、ないものとなってしまうようで…私は、言葉では言い表せないほどの喪失感に襲われました。

私はＫさんから、本当の介護とは何かをつきつけられました。そして、気づいたのです。病気や障害で、全てを失ったかのような家族の心の中にも、それでも、絶対に失わないものがある。それは絆だ。家族が認知症になっても、家族で過ごしたかけがえのない時間は、変わることなく心の中にあり続けること。さらには、その家族の絆を最後まで支えることが、介護であるということです。誰しもいつかは、自分や家族に介護が必要となる。Ｋさんのような状況に置かれている人が、もっといるかもしれない。「人の支えになりたい！」この想いは、どんどん強くなっています。私は、この想いを胸に、福祉を切り拓いていきます！

２　生徒を指導して

生徒が自身の想いや経験を振り返ることで、将来の目標が確固たるものになっていく姿を見届けることができました。地域の高齢者福祉を担う一員となれるよう、今後も指導していきたいです。

第６０回北海道高等学校教育研究大会
教科別集会家庭部会を終えて

市立札幌啓北商業高等学校　教諭　野村　良子

令和５年１月 12 日（木）、北海道札幌南高校３階視聴覚室において、研究主題「生涯を見通してよりよい生活を創造する力を育む家庭科教育」のもと、全道から 56 名（うちオンライン 16 名）が参加し、ハイブリッドで開催された。

１　総会

令和３年度事業報告・決算報告・会計監査報告、令和４年度事業計画・予算報告が承認された。令和５年度研究主題は役員・運営委員会に一任され、研究紀要執筆地区について確認した。

２　講演

演題：「3.11 を学びに変える」

講師：一般社団法人スマートサプライビジョン
　　理事兼特別講師　　佐藤　敏郎　氏

3.11 の体験談、当時の子どもたちの様子を通し、防災とは何かについてお話いただいた。また、活用しやすい防災マニュアルの作成や、停電を想定した避難訓練など、学校において実践すべき内容についても具体的に説明があった。「未来は必ずくる、どんな絶望の中に合っても時間だけは約束を守る。過去はなくならないで過ぎ去った後積み重なる。積み重なっていくからその上に未来がある。体験してからわかるのではあまりにももったいない、残念である。これを知っていて良かった、聞いておいて良かったということを１つでも２つでも今からすること、それが防災、備えである」。経験に基づく言葉は、とても重く心に響くものであった。

３　研究協議

(1) 研究発表

主題：「ICT 端末を活用した“学びが見える・共有する”授業実践について」

発表：北海道札幌北高等学校教諭　松本　奈巳

生徒の実態や教科の特性に応じて「効果が出る」と想定できる場合に、適切に ICT 端末を活用することで、主体的対話的で深い学びを実現できる。この点をふまえ、札幌北高校でどのように ICT 端末が活用されているか実践報告があった。また、端末活用の一例として、実際に Google Jamboard を使い、活発な意見交換が可能になることを実感し、授業実践の場でどう活かせるかを考えるきっかけとなった。

(2) 情報交換

研究発表の中で体験した Jamboard を使用して「防災教育」「ICT の活用」について協議し、各校の取り組み等の情報交換が行われた。

(3) 講評

北海道教育庁学校教育局高校総体推進課
高校総体式典係主査　　近藤　麻理子　様

自己の考えを再構築する過程を効率的に見える化し、クラス全員で速やかに情報を共有できればより理解が深まり学びの質も高まるのではないかという自身の問いに対し、日々試行錯誤を繰り返し、授業をより良いものにしたいという思いが伝わる、非常に参考となる実践報告であったとの講評をいただいた。

４　研究紀要

ﾀｲﾄﾙ：「主体的・対話的で深い学びの実現を目指した授業づくり
　　～１人１台端末の活用を通して～」

執筆：北海道函館西高等学校教諭　對島　珠望

住生活の単元における１人１台端を活用した授業実践について執筆いただいた。Jamboard を使ったグループワーク、調査・研究し作成したドキュメントの Padlet での共有、Form での自己評価など、Chromebook の具体的な活用方法が示されている。

初任段階教員研修１年次研修（高等学校）「一般研修」に参加して

北海道天売高等学校　教諭　村　上　成　美

１　時期と実施内容

新型コロナウイルス感染対策のため、今期は、対面ではなくオンラインで研修が行われました。第Ⅰ期は６月、第Ⅱ期は10月に開催されました。

(1)第Ⅰ期

第Ⅰ期の研修では、留萌管内の公立小学校、中学校、義務教育学校、高等学校及び、特別支援学校の初任者が対象となり、研修を行いました。ＨＲ経営をはじめとした、生徒指導法についてお話をいただいた後、全体を４～６人のグループに分けてケーススタディを行いました。

普段接している学年の違いから、同じケースでも対応の仕方に違いがありました。しかし、アプローチの方法が異なるだけで、目標とするゴールは共通していることに驚き、興味深く面白く感じたことを覚えています。

午後の研修では学校ごとに分かれて進めていきました。留萌管内の高校の初任者は、６名で生徒指導の実践に向けた、ロールプレイングを行ったり、指導案を持ち合って、教科指導の改善に向けた協議を行いました。

(2)第Ⅱ期

第Ⅱ期の研修は教科ごとに分かれて行い、全道の家庭科の初任者７名が集まりました。研修では、第Ⅰ期時から課題となっていた指導案作成と実践、そしてその振り返りを行いました。また、家庭科教育の現状と課題についてや、観点別評価の実践に向けて、ICTの活用法についても、それぞれの実践例を持ち合い、協議を行いました。

２　振り返りと今後

初任段階教員研修で、他の学校の先生方と交流することは、私にとってとても有意義な時間でした。目指すべき教育とは何か、そのためにどのような方法で指導を実践するのが望ましいのか、自分なりの最適解に近づくヒントを得ることができた研修でした。

(1)研修の振り返り（第Ⅱ期）

第Ⅱ期の研修では、観点別評価と探究的で深い学びについて重点的に協議を行いました。授業計画において、目標の明確化を意識することで、授業改善に繋がり、伝わりやすい授業がつくれるということを学びました。

また、初任者同士の交流の中から、先生方の様々な工夫が見られました。生徒や地域の特性を把握し、上手に授業に取り入れている先生ばかりで、教材研究や関係機関との情報交換の重要性を改めて実感しました。

(2)今後の展望について

私は、生徒が家庭科の授業で学習したことを、生徒の生活にどう還元されるのかが、家庭科において重要だと考えています。生徒自身の生活をより豊かにできるように、それらを教員として支えるべく、今後も研究や実践を重ねていきたいと思います。

天売高校では地域性を活かし、積極的に、地域と協働した学習活動を開発し実践したいと考えています。地域と連携した教育の実践は、どの地域においても重要視されます。地域に愛される高校、生徒が地域を愛せるような取り組みが出来る家庭科教員を目指したいです。

中堅教諭等資質向上研修（高等学校家庭）
第Ⅰ期・第Ⅱ期研修に参加して

北海道上士幌高等学校　教諭　田　中　裕　子

1　目　的

教育公務員特例法第24条に基づき、中堅教諭として必要な資質能力の育成・向上が図られるよう、講義や協議、演習等を通じて、中核的な役割を果たすことが期待される教諭としての職務の遂行に必要な事項に関する実践的な研修を行う。

2　日　程

第Ⅰ期　オンデマンド研修

第Ⅱ期　2022年12月21日(水)

3　研修内容

第Ⅰ期

講師…空知教育局高等学校教育指導班

指導主事　山　本　昌　枝　氏

(1)講義のねらい

①学習指導要領の改訂のポイントについて

②指導と評価の一体化のための学習評価について

(2)キーとなる資質能力

①実践的指導力(授業力)

②新たな教育課題への対応力

(3)主な内容

①主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善

②学習評価

③ICTを活用した授業改善

④第Ⅱ期に向け課題設定

課業期間中の実践

(1)年間指導計画

(2)学習指導案

※第Ⅰ期オンデマンド研修で学んだ「学習指導要領改訂のポイントについて」、「指導と評価の一体化のための学習評価について」、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」に基づいて作成した題材指導計画(評価も含む)に従って実際に指導を行い、その実施状況、課題等について第Ⅱ期研修で10分程のプレゼンテーションを行う。

第Ⅱ期(zoomによる遠隔研修)

運営者・講師・助言者

学校教育局高校総体推進課

高校総体式典係主査　近　藤　麻里子　氏

空知教育局高等学校教育指導班

指導主事　山　本　昌　枝　氏

(1)ねらい

①主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善

(2)主な内容

①教科等指導の工夫改善

②ミドルリーダーのキャリアデザイン

③研修の振り返り

※課業期間中に実践した授業について、参加者全員が10分程プレゼンテーションを実施

4　おわりに

今年度も、新型コロナウィルスの影響により、対面形式での研修は実施されなかったが、第Ⅱ期研修の最後に研修の振り返りとして、参加者同士で困っていることを情報共有する時間があり、交流することが出来た。

今後はこの研修での学びを生かし、家庭科教育の充実に努める。

V　福祉教育等に関する報告

第２０回「福祉に関する教科・科目設置校研究協議会」を終えて

函館大妻高等学校長　池　田　延　己

１　開会式

標記研究協議会が令和４年11月４日（金）、本校を会場に開催された。北海道高等学校長協会家庭部会長　田邊禎明校長の主催者挨拶及び北海道教育庁渡島教育局　柴田　亨局長を来賓にお迎えして実施された。

２　基調報告

報告者　北海道置戸高等学校長　長尾勝恵先生

①体験発表会が全国各地で開催

②全国福祉校長会の高橋福太郎理事長の急死

③2025年度迄東奥学園高校が理事長校

④その後の理事長校は５ブロックによる輪番制となり、北海道は2033年頃か。

⑤福祉の３Ｋイメージを払拭希望

⑥社会福祉・介護福祉検定に変更あり

３　基調講演

『函館市における福祉の現状と課題』

前函館市保健福祉部長　大泉　潤様

函館市の問題として、①社会的孤立、②生活習慣病の増加による健康格差、③人材不足があった。

①については、『誰一人、取りこぼさない』をテーマに、函館市独自に在宅福祉委員を設置。社会福祉士の評価を高めるように、市役所職員のキャリアパスも視野に入れ、人事交流を意図的に進めた。②については、若い世代の地元定着を目指し、京都府の認証制度を参考に人材育成・確保を図った。

③については、協会・健保と手を組み、札幌医科大学と協働して、健康経営をしている企業を積極的に認証した。

また、2022年４月、既存の地域包括支援センターに自立相談支援機関を加味し、高齢者の相談だけでなく、「世代を問わない困りごとを抱える人」相談窓口に進化させた。多様性と共生を念頭に、選択と集中を意識的に行った。

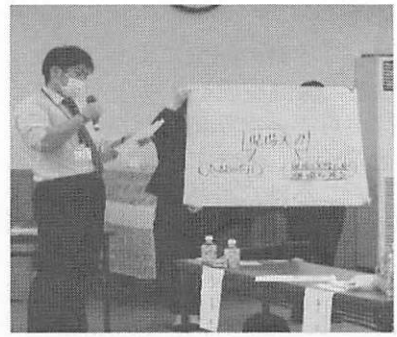
４　研究協議Ⅰ

介護福祉士養成課程において必須となった「医療的ケア」について、本校福祉科３年生36名による実技授業を参加者全員で見学。その後、本校講師による、授業を行う上での留意点について説明がなされた。引き続き「医療的ケアについての意見交換」と題して質疑応答が行われた。授業の指導方法だけでなく、授業構成への質問もあり、共通理解を図り、深めるために有意義な研究協議の場になった。

５　研究協議Ⅱ

「福祉教育について」と題し、介護福祉士養成校及び総合学科等の福祉科目設置校がお互いの教育課程の枠を超えてグループワークを行った。題材は『スーパービジョン・ピアカウンセリングの体験を通して課題解決をする』。

最初にお互いの教育活動での課題を提示し合い、その後グループで課題の解決を図るという手法で行われたが、話し合いが白熱し、時間を超過してしまうような場面もあった。



第７回　北海道地区高校生介護技術コンテストを開催して

当番校
北海道剣淵高等学校　教諭　髙倉　　彩

１　コンテストを終えて

今年度で７回目を迎えた北海道地区高校生介護技術コンテストは、「福祉を学ぶ生徒が介護技術を高めるとともに、様々な介護場面に対して適切かつ安全に支援できる能力を育成する」ことを目的とし、８月19日（金）に当別町にある北海道医療大学にて開催しました。

今年度も、新型コロナウイルスの影響を受け無観客での開催となりましたが、コンテストの様子を配信することで各高校、保護者の方に視聴していただくことができました。

モデル役を北海道石狩翔陽高校の木村聖美様、審査員を北海道医療大学の池森康裕様、株式会社シムスヘルパーステーションはばたき江別センター所長の笹珠美様に協力をいただき、様々な視点から審査をしていただきました。池森様からは、「利用者の自立支援や尊厳の保持をこころがけた、細かな配慮と工夫がなされたケアに感心した」と好評をいただきました。

コンテスト終了後は、参加者による学校紹介やグループディスカッションを通して交流活動を行いました。コロナ禍ではありましたが、同じ介護士を目指す仲間との一時を楽しんでいました。

今回、コンテストを開催するにあたり、多くの後援、協賛を賜りましたこと心からお礼申し上げます。

【競技課題】
前川美代子さんは、外出時の転倒により、左大腿骨頸部を骨折。老人保健施設へ入所となりました。杖での歩行が可能となりましたが、膝関節痛や転倒への恐怖から、車いすの使用を希望されています。若いころは衣料品店に勤め、おしゃれ好きな方です。ご家族が面会に来る予定です。身だしなみを整えて、テーブル席へご案内してください。

２　コンテスト結果と参加校

	学校名	生徒名
最優秀賞	北海道石狩翔陽高等学校	川上　茉優 岩岡　美鈴 佐々木結香
優秀賞	北海道留寿都高等学校	神原　小夏 菅根　真緒 竹田　結衣
参加校	北海道余市紅志高等学校	中島あずさ 和田　愛翔 菊地啓一郎
	北海道置戸高等学校	井関　　蓮 林　　遥菜 有金　将弥
	函館大妻高等学校	佐藤　湖雪 佐藤さくら 遠藤さくら
	北海道剣淵高等学校	浅野　羽音 田上　暖人 堤　　果凜

【介護技術の審査項目】
・利用者とのコミュニケーションができたか
・プライバシーへの配慮はできたか
・個人を尊重できたか
・自己決定を尊重できたか
・自立へ向けた支援ができたか
・安全や安楽への配慮ができたか
・個人因子や環境因子に基づいた支援ができたか
・介護者同士の連携や役割分担が適切にできたか
・時間内に介護を終了することができたか
（介護技術７分以内　アピール２分以内）

第９回全国高校生介護技術コンテストに参加して

第７回北海道地区高校生介護技術コンテスト最優秀賞受賞校
北海道石狩翔陽高等学校　教諭　佐　藤　由香里

１　大会概要

第32回全国産業教育フェア青森大会「第９回全国高校生介護技術コンテスト」が東奥学園高等学校を会場に、10月16日（日）に行われました。開催県枠出場校を含め、地区大会を勝ち抜いた12校が出場しました。

１ヶ月前に事前課題として、利用者様の基本情報（健康状態、心身機能、活動、参加、背景因子など）、物品、会場図が示されます。

その事前課題をもとに、競技開始25分前に当日課題が提示され、課題検討を行います。課題検討室には生徒のみが入室でき、これまで学んできた知識や技術を活用し、利用者様にとって最適な介護を考えます。課題検討は25分間という短時間で、介護方法やその根拠、介護のポイントなどの最終確認をして競技に臨みます。

競技は、課題に対する介護技術（７分間）と介護方法、根拠、工夫点などの説明（２分間）からなります。

【事前課題】

福井カヨさん（78歳・女性）は２年前に脳梗塞で倒れて入院、後遺症として軽度の左片麻痺と中等度の認知症がみられました。退院後、自宅で長男夫婦と生活していましたが、近所に買い物に行ったまま自宅に戻れなくなり警察に保護されたり、鍋に火をかけたことを忘れて焦がしてしまったりすることが多く起きるようになりました。そのため、家族の希望でグループホームに入居することになりました。グループホームでの個別援助計画には、福井さんができることを増やし、前向きに生活できるような支援が組み込まれています。

【当日課題】

16時、家族との外出から帰ってきた福井カヨさんは、入浴を終えて脱衣所で車いすに座っています。福井さんにパジャマを着ていただき、廊下に設置されている水分補給のスペースで水分補給の支援を行ってください。その後、ホールで福井さんの個別援助計画の一つである「洗濯物をたたむ」支援を行ってください。※入退室等のアルコールの手指消毒は省略します。

２　大会に参加して

本校からは介護職員初任者研修修了を目指す科目「介護実践」選択者のうち、代表として３年次生３名が出場しました。

当日までどのような介護技術を行うか課題がわからないため、様々な予想事例課題を設定し、放課後に練習に励みました。事前課題から福井さんの情報を読み取り、福井さんが望んでいる生活とは？を考えながら、各予想事例課題に対して、根拠に基づいた介護を考えていきました。

コンテスト当日は、全国大会という厳粛な雰囲気と審査員だけでなく多くの観客が介護の一つひとつを注目しているとてつもない緊張感でいっぱいでした。福井さんへかける声や手も震わせながらも、本校生徒らしい思いやりのある介護を一生懸命に行うことができました。

３　最後に

２週間前からの健康観察のほか、前日の事前説明会に抗原検査を行うなど、徹底した感染予防対策のもと、３年ぶりに開催された今大会。介護、福祉を学ぶ高校生が全国から集まり、互いの介護技術や利用者様に接する姿勢などを見て学びあう姿は素晴らしいものでした。

大いに刺激を受けた出場生徒には、この貴重な学びを後輩へと引き継いでほしいと思います。

Ⅵ　各地区（ブロック）家庭科研究会の一年間の活動状況

空知管内

◇名称：空知高等学校家庭科教育研究会
◇運営母体：空知高等学校教育研究会
◇実施回数：１年に１回
◇会員学校数／管内学校数：23校／28校
◇会員教員数／管内教員数：53人／56人
（実習助手等含む）
◇次年度事務局校：北海道砂川高等学校

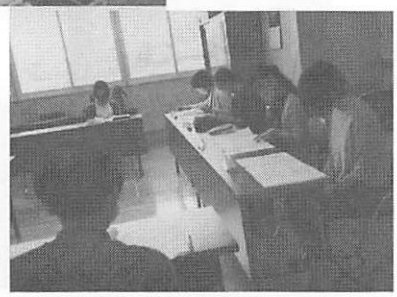
◆実施日　令和４年９月30日（参加者14名）

1　総会
(1)令和３年度　事業報告・会計決算報告
(2)令和４年度　事業計画案・予算案
(3)令和４年度　会員・規約の確認
(4)事務局ローテーションの確認
(5)令和５年度　研究会の内容について

2　研究協議
各校の授業実践報告

3　研修「介護実技研修」
講師：栗山町立北海道介護福祉学校
藤田　秀剛　様
会場：栗山町立北海道介護福祉学校
介護実習室

4　研究協議
助言：北海道教育庁空知教育局
教育支援課高等学校教育指導班
指導主事　山本　昌枝　様



石狩管内

◇名称：北海道高等学校教育研究会石狩支部家庭部会
◇運営母体：高教研石狩支部家庭部会
◇実施回数：１年に３回
◇会員学校数／管内学校数：36校／70校
◇会員教員数／管内教員数：46人／100人
◇次年度事務局校：北海道北広島高等学校

◆実施日　令和４年５月10日（参加者28名）

第１回高等学校石狩支部家庭部会研究協議会
(1)総会
(2)実践発表
「実習・調べ学習について」（札工）「ICT/chromebookの活用について」（札南）「伝統文化を主軸として授業づくり」（白石）「卒業後の食習慣を見据えて」（東豊）「外部講師招聘を取り入れた授業展開」（東陵）「家庭科技術検定（保育）４級の内容を生かした授業」（当別）「住生活をつくる実習例」（当別）「体験的な学習の紹介」（丘珠）の発表が行われた。

◆実施日　令和４年10月４日（参加者24名）

第２回高等学校石狩支部家庭部会研究協議会
(1)JICA体験プログラム『地球体験学習コース』
JICA内の体験型施設を見学し、民族衣装やパネル展示を通じて世界の多様性や課題を確認した。また、SDGsに関する展示を体験しながら見学することで、世界の現状・課題を再確認することができた。
(2)ワークショップ
①SDGsアクションカードゲーム「X（クロス）」
②ファッション
～開発教育アクティビティ集５～
エシカルファッションやSDGsについて学びを深めるワークショップを２種類体験した。紹介していただいたものは、各学校の実態に合わせて工夫しながら授業で活用できるものであった。

◆実施日　令和５年２月７日(火)

第３回高等学校石狩支部家庭部会研究協議会

後志管内

◇名称：第41回後志管内高等学校家庭科研究会
　　総会・研究協議会
◇運営母体：後志管内高等学校家庭科研究会
◇実施回数：１年に１回
◇会員学校数／管内学校数：13校／20校
◇会員教員数／管内教員数：13名／17名
◇次年度事務局校：北海道ニセコ高等学校

◆実施日　令和４年11月25日（参加者９名）

1　総会
(1)本年度役員の確認
(2)令和３年度事業報告
(3)令和４年度事業（案）
(4)令和５年度以降の当番校の確認
(5)令和５年度全道家庭科研究協議会運営研究員等の確認

2　研究会
(1)交流
「金融教育の実践交流」
使用教材や実践方法、成果や課題の交流
(2)研究協議
「効果的な金融教育のヒント」
助言　北海道教育庁空知教育局
教育支援課高等学校教育指導班
指導主事　山本　昌枝　様

胆振管内

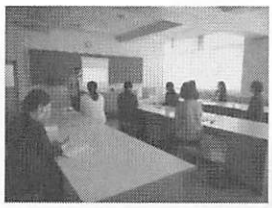
◇名称：令和４年度胆振管内高等学校教育研究会家庭部会
◇運営母体：胆振管内高等学校教育研究会
◇実施回数：１年に１回
◇会員学校数／管内学校数：25校／25校
◇会員教員数／管内教員数：30人／30人
（講師５名含む）
◇次年度事務局校：北海道伊達開来高等学校

◆実施日　令和４年９月14日（参加者９名）

1　総会
(1)事業報告（令和元～３年）
(2)平成31年（令和元年）度
決算報告・監査報告
＊令和２・３年度については未実施
(3)令和４年度事業計画（案）
(4)令和４年度予算（案）
(5)令和４年度役員
(6)連絡・その他
①Ｒ６年度以降の管内事務局校の担当について
②北海道高等学校家庭科研究協議会のＲ５年度司会者とＲ６年度提言者について
③胆振Ａグループの再編成について

2　研修会
「地域の産業と人材を活用した授業実践について」
講師　四代目中澤農園
中　澤　　和　晴　様

3　各校交流会
(1)コロナ禍における実習の実施状況
(2)新カリの観点別評価について



日高管内

◇名称：令和４年度日高管内高等学校教育研究会
　　家庭部会
◇運営母体：北海道静内高等学校
◇実施回数：１年に１回
◇会員学校数／管内学校数：６校／７校
◇会員教員数／管内教員数：７人／７人
◇次年度事務局校：北海道平取高等学校

◆実施日　令和４年10月26日（水）
（参加者７名）

1　研修
「認知症サポーター（オレンジリング）養成講座」
(1)講師　新ひだか町地域包括支援センター
　主任作業療法士　廣田　大輔　様
(2)内容　・認知症を正しく理解し、認知症の方やその家族を支援する方法を学ぶ。
　・認知症サポーターの啓発活動の重要性を学ぶ。

（悪い対応と良い対応のロールプレイの様子）

2　研究協議
(1)教科横断的な学びについて
(2)ＩＣＴの活用について
(3)観点別評価方法について
　・「主体的に学習に取り組む態度」の評価について
　・ＡＢＣの評価について
(4)授業内で活用している出前授業や外部事業所等について

渡島・檜山管内

◇名称：令和４年度渡島・檜山地区高等学校
　　家庭科部会研究協議会
◇運営母体：遺愛女子高等学校
◇実施回数：１年に１回
◇会員学校数／管内学校数：19／28校
◇会員教員数／管内教員数：31／40人
◇次年度事務局校：函館大妻高等学校

◆実施日時：令和４年11月８日（火）
（参加者14名）

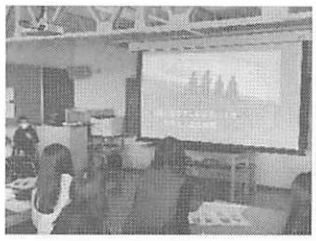
(1)総会
①令和３年度事業報告・決算報告
②令和３年度会計監査報告
③令和４年度予算案審議
④当番校ローテーション確認

(2)研究協議
①研修講座
　テーマ：「時を超えた贈り物
　重要文化財遺愛学院本館」
　講　師：文化財建造保存技術協会
　設計監理事務所　所長　内海　勝博　様
②研究協議
　「生徒が所有するICT端末を使うBYOD方式でのICT教育を開始した授業展開例
　（クロムブックを活用した取り組み等）」
森高校の金子先生による実践例を紹介してもらった。
各学校で取り組んでいるICT教育の利点と課題など、情報交換し、今後の授業展開に役立てられるよう質疑応答も活発に行われた。
普段から疑問に思っていることや、分からないことをお互い質問し合うことで、問題が解決し、有益な情報を得ることができた。

上川・名寄地区

◇名称：上川管内高等学校教育研究会
　　教務部会家庭分科会
◇運営母体：上川管内高等学校教育研究会
◇実施回数：１年に２回
◇会員学校数／管内学校数：25校／30校
◇会員教員数／管内教員数：47人／47人
　　（実習助手含む）
◇次年度事務局校：北海道富良野緑峰高等学校

◆実施日　令和４年５月９日（参加者20名）
(1)総会
(2)研修・研究協議
研究協議　令和6年度提言について
研修①「地域社会との関わりについて」講話
「鷹栖高校と連携した授業展開について」
講師　鷹栖町社会福祉協議会　中出　幸恵　氏
「地域とつながる活動」
講師　NPO法人カムイ大雪バリアフリー研究所
　　五十嵐　真幸　氏
研修②「地域社会との関わりについて」
　　（ボッチャ体験）
講師　NPO法人カムイ大雪バリアフリー研究所
　　五十嵐　真幸　氏



◆実施日　令和４年８月４日（参加者21名）
　　（オンライン研修）
研修①「新学習指導要領及び家庭科におけるICTの活用について」
講師　石狩教育局教育支援課高等学校教育指導班
主任指導主事　　髙井　　央　氏
研修②「地域と連携した課題解決型学習の実践～新学習指導要領の評価と在り方を見据えて」
講師　北海道美瑛高等学校教諭　森本　鈴奈　氏

留萌管内

◇名称：留萌管内高等学校教育研究会
◇運営母体：留萌管内高等学校教育研究会
◇実施回数：１年に１回
◇会員学校数／管内学校数：３校／６校
◇会員教員数／管内教員数：５人／５人
　　（育休１含む）
◇次年度事務局校：北海道留萌高等学校

◆実施日　令和４年10月27日（木）
(1)総会
・令和３年度事業報告・会計・監査報告
・令和４年度事業計画案・予算案
(2)研修
①天塩川の自然および自然再生事業視察
天塩町振老地区において、第１学年フィールドワークを視察。天塩町の自然を紹介、また、幌延河川事務所の天塩川自然再生事業の一環として、植栽を実施。環境保全に取り組む本校の取り組みを視察。
②「絶滅の危機に瀕した猛禽類との共生を目指して」～猛禽類医学研究所獣医師　齊藤慶輔
釧路を拠点に活動する齊藤先生の第１学年に向けて講演を実施、その様子を参観。猛禽類の保護活動という世界でも稀有な活動をする齊藤先生の講演は生徒も我々も貴重な体験となった。
(3)研究協議
消費環境分野、金融教育について情報交換。金融教育についての本校の取り組みを紹介。

宗谷管内

◇名称：宗谷管内高等学校教育研究会家庭部会
　　研究協議会
◇運営母体：宗谷管内高等学校教育研究会
◇実施回数：隔年
◇会員学校数／管内学校数：７校／７校
◇会員教員数／管内教員数：８名／８名
　　（講師含む）
◇次回事務局校：北海道稚内高等学校

◆実施日　令和４年11月25日（金）
　　（参加者５名）

(1)研究発表
「地域と連携した実践的・体験的な学習活動について」
　発表者　北海道浜頓別高等学校
　　奈良崎　愛　教諭

(2)研究協議
「各校における実践と課題」
　コロナウイルス感染拡大のため、平成28年以後２回中止となり、久々の開催となりました。実践的な学習が難しい現状で各校における地域との連携について様々な意見が出されました。
　また、出前授業や地産地消による食材について、など多岐にわたり意見交換をすることができました。

(3)総評
　北海道教育庁宗谷教育局
　教育支援課高等学校教育指導班
　　指導主事　山崎　浩和　氏

オホーツク管内

◇名称：オホーツク管内高等学校家庭科教育研究会
◇運営母体：オホーツク管内高等学校家庭科教育研究会
◇実施回数：１年に１回
◇会員学校数／管内学校数：23校／23校
◇会員教員数／管内教員数：28人／28人
◇次年度事務局校：北海道北見北斗高等学校

◆実施日　令和４年10月14日（金）
　　（参加者16名）

(1)総会
(2)実技講習
「命の授業～鶏の屠殺・解体から食物へ～」
　講師　北海道美幌高等学校
　　三浦　隆雄　教諭
　　植村　敏志　実習助手
(3)研究協議
　①ＩＣＴを活用した授業
　②観点別評価の実践例

十勝管内

◇名称：十勝管内高等学校教育研究会家庭分科会
◇運営母体：十勝管内高等学校教育研究会
◇実施回数：１年に２回
◇会員学校数／管内学校数：21校／22校
◇会員教員数／管内教員数：35人／35人
（講師、実習助手を含む）
◇次年度事務局校：北海道幕別清陵高等学校

◆実施日　令和４年６月９日（参加者19名）
(1)総会
・令和３年度事業、決算、会計監査報告
・令和４年度会員、役員
・令和４年度事業案及び予算案
・次年度以降の当番校
・北海道高等学校家庭科教育研究協議会
(2)研究協議会
テーマ「生活課題を主体的に解決できる生徒の育成を目指した家庭科教育の実践」

◆実施日　令和４年11月11日（参加者15名）
(1)授業公開
「未来をかえるものさしＳＤＧｓ」
授業者　芽室高等学校　小林郁美
助言者　石狩教育局教育支援課
高等学校教育指導班主任主事
髙井　　央　氏
(2)講話１
「新学習指導要領における家庭科教育実践例」
講　師　石狩教育局教育支援課
高等学校教育指導班主任主事
髙井　　央　氏
(3)講話２
「高校生のための金融教育」
講　師　北海道銀行芽室支店支店長代理
川田　啓一　氏
(4)研究協議会
テーマ「生活課題を主体的に解決できる生徒の育成を目指した家庭科教育の実践」

釧根管内

◇名称：釧根管内高等学校家庭科教育研究会
◇運営母体：釧根管内高等学校教育研究会
◇実施回数：１年に１回
◇会員学校数／管内学校数：20校／20校
◇会員教員数／管内教員数：24人／24人
◇次年度事務局校：武修館高等学校

◆実施日　令和４年10月21日（金）
（参加者15名）
(1)総会
・令和３年度　事業報告・会計決算報告
・令和４年度　事業計画案
・事務局ローテーションの確認
・令和５年度　当番校の確認

(2)研修
「金融・経済教育プログラム（体験ワークショップ）」
講師　財務省北海道財務局
財務行政調整官　伊賀　健次　氏
研修内容
・資産形成ゲーム
・金融リテラシーと資産形成

(3)研究協議
・「金融・経済教育」の各校での取り組み
・新学習指導要領を踏まえた各校の家庭科教育について
・授業実践の情報交換

Ⅶ　特　別　寄　稿

気がつけば３８年！

北海道高等学校長協会家庭部会副会長
北海道月形高等学校長　宮　﨑　　円

「いいな～男子は体育で…。」睡魔と戦いつつ、ぼんやりとグラウンドを眺めながら『家庭一般』の授業を受けていた私が、よもや高校の家庭科教師として38年間勤め上げるとは誰が想像したでしょうか?！

幼稚園教諭になりたくて受けた大学は、中学校教員養成課程（家庭）に合格し、中学校家庭科で受けた採用試験は、なぜか高校で採用され、初任者研修では、あまりの技術力不足に家政科出身の同期のみなさんに呆れられ…と、その後も全くダメダメな家庭科教員生活を歩んできたことを思いだし、赤面しながらこの「特別寄稿」を執筆しております。

未だに「得意料理は何ですか？」と聞かれて沈黙してしまう私ですが、『三つ子の魂百まで』。高校時代の家庭一般の授業で教わった事は、意外にもしっかりと記憶の中に残っているものです。親子どんぶりの作り方やスパゲティのゆで方のちょっとしたコツ、初めて作ったハンバーグのこね方。気がつけば、同じように授業で教える自分がいました。

生徒の胃袋をつかめば家庭科の授業を好きになってくれるに違いないという魂胆は、「先生、この前授業で作った○○美味しかったから家でも作ってみたよ」「授業で使ったレシピ集は一生大事にするから」と。高校での家庭科の授業を終えてしまえば、ほとんどの生徒は二度と“家庭科的”な勉強をする機会がないことでしょう。

この38年間に出会った生徒達が、自分事として家族や家庭のあり方を考え、衣食住について実践し、消費生活・環境問題などについて考えながら、健やかな人生を主体的に日々営んでいてくれていることを願ってやまない今日この頃です。

大変お世話になりました。

北海道高等学校長協会家庭部会副部会長
北海道札幌手稲高等学校長　吉　田　岳　夫

「家庭科部会ではありません、家庭部会です」当時の江別高校教頭、現月形高校宮﨑校長先生から言われた最初の言葉でした。それほど「家庭部会」に全く縁がなく理解をしていなかった自分が、江別高校に着任＝家庭部会長という重責を担うことになりました。すぐに当時の三笠高校佐々木校長先生（現北海道文教大学附属高校長）にお会いして家庭部会や家庭科教育についてレクチャーを受けました。また、福祉については函館大妻高校の池田校長先生にお電話でご挨拶して教えを受けました。ゼロというよりマイナスからのスタートで見るもの聞くものがすべて初めてで新鮮でした。

また、４年間の部会長経験で全国の家庭部会との関係も構築することが出来、加藤事務局長には大変お世話になりました。そのこともあり、令和元年の全国家庭部会秋季研究協議会北海道大会では道内の家庭部会役員の校長先生方をはじめ、多くの校長先生方のご理解とご協力を賜り成功裏に導くことが出来ました。

その後も、家庭部会内での担当校のローテーションで、技術検定代表理事、家庭クラブ成人会長を兼ねる年度もありましたが、それまでの経験からなんとかその任務を遂行することが出来ました。これもひとえに、家庭科の校長先生・教頭先生・指導主事・江別高校の生活デザイン科の先生方・事務局長の教頭先生のおかげと深く感謝しております。

道内の家庭科の専科は厳しい状況になりつつありますが、「家庭科」という教科は高校生がこの先の人生を豊かにするため、生き抜く力を養うために絶対に必要な教科です。

今後も家庭部会・家庭科のさらなる発展をご祈念しつつ、大変雑駁ではありますが４年間の部会長と１年間の副部会長でお世話になったお礼とさせていただきます。ありがとうございました。

家庭科教育との思い出

北海道当別高等学校長　宮　本　　匠

1　はじめに

私は昭和60年４月に農業科の教員として奉職しました。教諭時代は３校の農業高校を経験し、教頭に昇任した初任校が家庭科設置校の当別高校（当時は定時制農業科の教頭）で、教員生活そして管理職としての最後の学校もここ当別高校ということで、これも何かの縁かなと感じています。

2　教諭時代

(1)　家庭科教育との関わり

農業教育の大きな柱である学校農業クラブ活動の三大事業の一つ、実績発表大会「Ｃの部（主に家庭生活に関すること）」（※今は区分名や内容が変わっていますが）においては、私が勤務した学校のみならず、全道の農業高校の多くで家庭科の先生が専攻班をご指導いただき、農業クラブ全国大会でも指導した専攻班を最優秀賞に導くなど、同じ産業教育の教員としてたいへんお世話になり、また勉強させていただきました。

(2) 産業教育フェアでの思い出

美幌農業（当時）高校時代に、まだ農業高校単独で実施していた食彩フェアの当番校業務に平成13年度から３年間、携わらせていただきました。当番校業務の３年目である平成15年度の産業教育フェア全国大会が北海道で行われることとなり、その前年度がプレ大会と位置づけられたため、農業高校単独で行っていた食彩フェアは、平成14年度より北海道産業教育フェアとして開催され、家庭科部会も参加されることとなりました。

全国大会に向けて道教委の中にも担当部署が設置され、私は当番校の一人の担当者ではありましたが、その担当部署や各部会の担当者の方々と電話連絡等諸対応を進めることとなりました。特に家庭科部会の皆様には、いろいろとご指摘を受けたり、ともに協力し合ったりと思い出は深いものがあり、私の教員人生においてもインパクトのある出来事でした。改めてお世話になりましたことを感謝申しあげます。

3　管理職時代

(1) 校長としての関わり

３年前に当別高校に赴任し、本格的に家庭科教育に携わることとなりました。教頭時代も含め、これまで述べてきたような教育活動の中で家庭科教育と関わってきましたが、専科を置く学校の校長としての関わりは新鮮で、まさに“驚きと発見”がいっぱいでした。

校内では、毎年３年生が行う卒業制作発表会（保育、食物調理コースともに）、各種行事における本校家政科生徒の企画力、実践力は唯々感服するものばかりでした。もちろん、そのための準備から実践に至るまでの家政科の先生方の緻密なご指導があったからこそであることは言うまでもありません。

対外的な役職もいくつか経験させていただき（技術検定委員会副委員長他）、また、昨年度全道高校家庭クラブ連盟研究大会・総会の当番校を努めましたが、慣れないリモート開催にもかかわらず、本校の先生方と生徒が一丸となって取り進め、また、参加された各学校の先生方や生徒の皆さんの熱心な取組のお陰もあり無事終了できました。このように家庭科教育の奥深さや重要さを骨の髄まで感じることができました。

4　おわりに

定年退職を迎える私に、このような執筆の機会を与えてくださった皆様に感謝とお礼をいたしますとともに、これからの家庭科教育がますます充実し、発展いたしますことをお祈り申しあげ、結びとします。

編　集　後　記

「こですHOKKAIDO2022」の発刊にあたり

今年度から、いよいよ新高等学校学習指導要領等が年次進行で実施されます。

「生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、実践的・体験的な学習活動を通して、様々な人々と協働し、よりよい社会の構築に向けて、男女が協力して主体的に家庭や地域の生活を創造する資質・能力を育成することを目指す」ことを家庭科の目標としています。その資質・能力を端的に言うと、１つめは、「家族・家庭、衣食住、消費や環境などについて、生活を主体的に営むために必要な理解を図るとともに、それらに係る技能を身に付けるようにする。」２つめは、「生涯を見通して生活の課題を解決する力を養う。」３つめは、「よりよい社会の構築に向けて、地域社会に参画し、自分や家庭、地域の生活を主体的に創造しようとする実践的な態度を養う。」ことであり、前学習指導要領の目標と比較すると、育成すべき資質・能力がより具体的に述べられています。

家庭科の男女共修が始まって間もなく30年となるなか、昨年４月からの成年年齢の引き下げもあり、教科としての守備範囲は衣食住から、子育て、介護、家族形成、ライフプラン、消費・経済生活、環境等とますます幅広く、自らの生活に照らし合わせて学問の意義を実感できる教科と強く感じます。

ある調査では、社会人と高校生に家庭科を学ぶ意義についての質問の結果があります。社会人に対しては、「家庭科における衣食住の知識と技能の修得や、家庭生活や子育てや社会福祉などの理解」について重要性を感じるか、の質問に対し、90%以上が重視している、どちらかというと重視している、との回答でした。高校生に対しては家庭科を学ぶことの良さについて、「生活の知識・技能など他教科とは異なる学びができる」とういう項目に、90%以上が、そう思う、どちらかといえばそう思う、という回答でした。また、家庭科における他の質問項目でも、両対象者において80%以上がその重要性とよさについて肯定的な回答でした。

この度の「こですHOKKAIDO 2022」の編集に際し、家庭科教育の重要性を改めて知る機会となりました。本誌が、多くの方々が家庭科教育をより知る機会となり、それぞれの時代の実践を記録として残し、次の時代の貴重な資料となる役割を果たし、家庭科教育のますますの発展につながることを祈念申し上げます。

「こですHOKKAIDO 2022」編集にあたり、大変お忙しい中、寄稿していただきました、校長先生方や多くの先生方、そしてご指導とご助言をいただきました関係の皆様に心よりお礼を申し上げ、担当校を代表しての挨拶といたします。

こですHOKKAIDO2022編集担当校
北海道三笠高等学校長　藤　田　博　史

こです　HOKKAIDO とは

「こ」Collected papers ……… 集　録

「で」Domestic Science ……… 家庭科

「す」Studies …… 研　究

家庭部会が研修して、それをまとめあげる

こーして仕上げることを、でかすと解釈し

北海道は、「こーですョ」という意味です

北海道高等学校長協会家庭部会　こです HOKKAIDO 2022

発行日　令和５年３月31日
発　行　北海道高等学校長協会家庭部会事務局
（北海道江別高等学校）
編　集　北海道三笠高等学校
印刷所　社会福祉法人　共友会　札幌福祉印刷
札幌市西区西町北15丁目５番７号
TEL　(011) 667-7771
FAX　(011) 667-9750